昨年の史學地理學界

史學界

史學理論　自然科學に對して歴史學或は文化學の成立を說く西田獨逸派の主張は、其宣傳我國に於ても近時著しく視聽を惹き來り是れが影響による論議亦多きを加へ來れり。而して歴史學の認識論的根柢を究めんとする此の新カント派の哲學の攻究は、又引いて、其泉源をカントに討れんとするに至つて、今や一般思想界は正しく、カントに還つて、其の批判哲學の興隆甚しく催されたるを觀はしむ。從つて此はたゞ、歴史學の理論、又は其方法論の上に於てのみ言ふべきにあらずして、寧ろ史學の境域よりは一般社會諸科學の上に於て流動する近時の氣運なりとすべく、之れを以て、假りに社會科學のカント化と見ば、史學も亦其情勢に於て著しく隆まれりと謂ふべきなり。而してこの風運は、歴史學の領域内に就いて觀るならば、蓋日昌運の自然科學的思想に立脚する諸種の史觀に對して早くも吊鐘を撞かんとする感あるものにして、彼の自然科學的の普遍化に對して、此は史學の知識は飽らく批判的ならざるべからずして、之れを特殊化せんとする要求の切實なるものあるを知るべし。されば歳々寂寥たる史學理論の方面の研究は、昨年を以て其前年に比すれば、活氣あり、且つ眞率なる方向をとれりと謂ふべきなり。然れども、尙問題中心がリツカート一派によつて催されたる認識論的研究にあるを以て、專ら史學に携はる學徒の之れに與らざるか如き觀あるもの聊か遺憾なしとせず。

史學の性質に關するものに就いては、まづ一般科學に關する著書に、「科學概論」（田邊元）あり。其中、史學に關聯する所少なからず、「科學の分類」の章下に於ては、ベーコンの三能力による學問の分類、史學、詩學、理學、或はヴントの自然、精神に分つ二科學の分類、其他、「自然科學と文化學」なる條項等大に注意すべき者あり、此の條に於ては、ヴインデルバンド、リツカート一派の主張の大概を知るべく又歴史の對象は文化價値を有するものならざるべからずてふ論議も又聽くを得べし、而して尙諸科學の對象たる種々の世界は夫れ夫れ獨特のアプリオリに由り科學的認識の構成する所たりとする認識論上の所說も亦諦聽すべきなり。

リツカート思想に基く所說に就ては、一昨年の歳暮にあたりて

「經濟哲學の諸問題」（左右田喜一郎）出版せられて、其内には著者がさきに雜誌「哲學研究」に於て發表したる經濟學の認識論的研究なる「經濟哲學の問題」が修補せられて收められ、此方面の注意を新たにすると共に、「歷史學派から文化學派へ」（大西猪之介、國民經濟雜誌）も亦經濟學に就いて、認識論的批判を試み、經濟學に於ける歷史學派の學問上に於ける意義を論じ、必然的徑路として文化學派經濟學が起り來れる所以を闡明せんとせり其所論もとより經濟學に關するものなれども、亦一般社會科學に於ける法則、或は自然科學的の普遍化に就いて所論を行るものリッカート一派主唱の由來を說述すること詳細なり。卽ち正統學派の法則論も歷史學派によつて唱へらるゝ、歷史的時代區分の如きものも、要するに認識論的に觀察せば、特殊を普遍化するものとして同一性質たり、而して普遍化以外の立場に於ては、已にヴインデルバンド、リッカートの名盛なりと雖、其以外、クローチエ、ゼノポールあると共に、又其以前に溯らば、ライプニッツ、及びメンゲルあり、然れども、メンゲル時代に於ては歷史學派新興隆盛の時代に屬して其論頗らるゝこと少なく、リッカートの時に至つて歷史學派の功非いよ〳〵明かに認められしを說けり。又歷史學の性質論として、この西南獨逸派の思想を參酌し說けるものには、「歷史的認識批判の原理」（紀平正美、史學雜誌）あり著者は、西南獨逸派がヴント一派の自然科學精神科學の對立を破壞し、尙又歷史は繰り返すものなりと云ふ通俗的見解を打破し、歷史は唯一回生起するものにして、その一回の事件に價値を認識すべしと云ふ主張を說いて、こゝに歷史の新意義生じたりとし、歷史は或る事件が如何なる意義を有するやの價値の定立なり、故に歷史學は自然科學とは性質を異にし、寧ろ哲學なりとすべく、是れは永き時代の上に人間性なるものゝ現實し行く過程に外ならずして哲學が純論理形式なるに對して、其れに內容を與ふるものは歷史なりとせり。同じくリッカート思想の影響を受けたるものにして特殊史に關するものには、「美術史の對象」（植田壽藏、哲學研究）あり。美術は天才の創造にして、其價値は特殊的にして個人的たらざるべからず。從つて美術史は西南獨逸派の文化學に關する主張の如く、其對象を價値に關係せしめつゝ特殊的に觀察すべき科學の一なり。而も其特殊的觀方の底には、普遍的なる見方の豫想せらるゝことを見逃すべからず、是れ天才は一般美術的先驗の現れなるを以てなり、故に美術史はカリエール又はテーンの考ふる如く、時代文化或は環境の關係を說明するを要せず、只天才によりて、美術的價値の增大進化し行く經過に外ならず、美術家の傳記的事實、或は美術的作品の一般社會に對する影響の如き眞の美術史に於ては全く交涉なきものと見るを得べしとせり

かくの如くにして、西南獨逸派の新潮の諸方面に汲み入れらるものあるにつれて、一方自然科學的普通化的考察は其臺容甚だあがらざるものあり、ライプチッヒ學統とも稱すべきこの方面に於ては、獨り、「民族心理學」（桑田芳藏）ありて、ヴントの企てし、原始文化狀態、或は其の發達徑路の一般考察が我學界に於ても紹介、研鑽せらるゝ上に於て有益なる著作にして、史學の考察法に於ても裨補すること多かるべし。

而して、史學知識の認識論的研究或は批判的風潮の盛なるによりて、カント哲學に關する興味は已に前々年より蔚興し來る如く見はしと共に、昨年之れに繼續するもの少からず、一昨歲來より前年初に亘りて、「カント國家及法律哲學と論理形式主義經濟學」（福田德三　三田學會雜誌）の如き出でゝ、他所ながら、社會科學の方面に於て認識論と批判哲學に對する注意を惹し、又「カントと晩近の社會主義」（米田庄太郎　經濟論叢）は完結せざれども已に文中、自然科學的史觀の一として觀るべき唯物史觀の解釋の變移を說き、社會主義の哲學思想が、かのマルクスの唯物史觀を如何に解釋したるかを見、又唯物史觀の眞相は批判的に考察することに於て疑惑多くして、其考察は西曆十八百九十年代より大に發展し來れるを說けり、尙ほ史學の考察方法に關しては、「歷史の精神的說明」（松井等、國學院雜誌）あり、主として米國 Shipe, Mathews, Spiritual Interpretation of History を紹介し、之れに著者の懷抱を加へたるもの、其要旨は、近時の歷史的因素として、經濟的勢力を重大なる風潮に對して史實の上に、精神的影響の多大なるを云ふにありて歷史研究者が精神と物質的との兩要件を相調和せしむべきを說きたるものにして平明溫藉の所論なり。

〔西田〕

國史　大正七年に於ける吾が國史學界の概況を記述するに當り、先づ通史及び時代史的の論著より筆を染めんに、各時代に亘れるものには「國史の研究、各說の部一」（黑板勝美）は先年刊行の總論の部と共に著者が晶に出版せし「國史の研究」の增補版にして最近に屬する諸家の研究を收め補版等をも增加し。又別に特色ある國史研究年表を添へたり。「國史講習錄」は昨年に於て完結を告げたり。人物を中心として其時代を述べ、或は評論を試みたるものには「新田氏の研究」（藤田晴一）あり鎌倉時代に於ける地方豪族としての新田氏より、義貞及び其一族の活動を叙したるが、中にも伊豫に於ける新田一黨の事蹟を詳叙し、其戰蹟に就ては實地踏査の結果を擧げたるが如きは著者の勞を見るべし。「德川慶喜公傳」（澁澤榮一）は浩瀚なる編述にして、昨年の史界を飾りしもの其誕生より薨去に至るまでを說き內外至難の政局に際會したる最後將軍の身邊を彰かにしたるものなれども兼ねて又幕末維

新の大變革期に於ける大政治史として見らるべし。就中、薩長二藩の軋轢が幾多の波瀾を生ぜし委曲、文久二年冬大原二位の持參せる三事策が實は慶喜と松平春嶽との登用を主眼としたるものにして、その一箇條のみ幕府に傳宣されし事、五月十日の攘夷期を定めたるは討幕派の秘謀に報ゐたる一種の權謀なりし事、八幡山上の勅名を辭したるは帶刀拜賜を忌避せるに非る事情等は特に留意すべき記述とすべく、それと併せ見るべきものに「王政復古の歴史」（萩野由之）あり、德川時代の中葉以來、朝威伸張して公武の衝突となり、一變して公武合體の計畫となり、再轉して幕府の衰亡となり、王政復古を見るに至りし徑路を詳密に講述し、王政復古の大事業の完成せしは一に國民の心中に皇室中心思想が充溢したる爲めなりと論じたり、「文久三年八月十八日政變につきて」（精屋狗太郎、歴史地理）は是日の政變が、長州及び過激なる志士の計畫せる、大和行幸に反對したる薩會兩藩士の企圖に起因する外に、池田慶德、池田茂政、上杉齊憲、蜂須賀茂韶の三藩主一世子の連合して大和行幸に反對し、朝廷を動かし、事情あるを說き、前者と共に維新史考究上一歩を進めたりと言ふべし。

大正十年を期して修せられんとする聖德太子千三百年御忌の奉贊會の設立あるに關聯して聖德太子に關するものには「聖德太子小觀」（黑板勝美）「文化史上より觀たる聖德太子」（同人、歴史と地理）「聖德太子の內治外交」（內藤虎次郎、同誌）「聖德太子傳の奇蹟に就いて」（喜田貞吉、同誌）「太子の流芳」（西田直二郎、同誌）「聖德太子傳の研究」（橋川正、無盡燈）等あり、各方面より太子の偉蹟を讚歎し、又太子に關する史料の年代を考究せり。「足利義政」（三浦周行、歴史と地理）はその時代と人物とを評論して、天才肌にして文學、朝儀にまでも其才能を現はしたる義政は、境遇上其意志薄弱なりしが、不安定なる生活の裡になほ乃祖義滿の模倣を事とし、時代の因襲の打破と復古的傾向の二大潮流の分岐點に立ち。數奇なる公私の生活の中に自ら開拓したる慰安に生き、世事には案外に無關心なりしが如くにして自己の無能に對する自覺ありしを說き、「上洛前の足利義昭と織田信長」（渡邊世祐、史學雜誌）は兩者の關係が從來唱へらるゝが如き偶發又は突發に非ずして、早く豫備的交渉と十分の理解との有せし由來を明かにし、「福島正則人物論」（藤岡繼平、尙古）は大阪陣に於ける彼れに首鼠兩端の評あるも、城中に兵糧米を送りし事なく、常に豐臣氏に恩を寄し事は否むべからず、要するに時代を超越したる英傑には非れども、主張を變ぜず天性を押通したる所に其特色ありとせり。「後光明天皇の御好學と朝山意林庵」（再び）（三浦周行、史學雜誌）は最近發見の荷田延重日記等の二三新史料によりて、往年の研究を補修したるものに

して其前身の長講堂長老たりしを確證し、進講の徑路は二條廉道の推輓による事多きを說き、又其、北白川三位入道と呼ばれしには深き意味を認めず、新に發見せられたる延重日記によりて承應二年二月二日の進講以後數度の進講ありしことを明らかにし其の中止が禁裏の炎上によるを辨じたり、「德川綱吉及其の時代」（古田良一、藝文）は其好學が桂昌院に負ふ所多く、其政治方針の文治主義なりしもこれが爲めなりと論じ、晩年擘政の續出せしは理性を失ひ感情によりて行動せし爲めにして其治世の元祿時代に燦爛たる文化の生ぜしは幕府基礎の確立、滿朝の權力擴大、鎖國完成によるとし、此時代に生活の向上せる事を注意せり、此時代の文學に關しては「芭蕉と良寛」（岡崎義惠、帝國文學）あり、芭蕉は敏感にして穎良なれども、良寛は魯鈍にして雅純なりとて其作品を論じ、前者が文藝復興の運に會し、長き傳說の上に一歩を進めて近世的なる新詩風を建設し、後者が江戸文化頹廢の時期に際して原始的歌謠の凉朴に復歸したるを指摘せり、「廣瀨旭莊」（武藤長平、歷史地理）が旭莊の詩才、著書、交遊を說きて、彼れが學德兼備の高士に非ず、其滿々たる霸氣は兄淡窓の如く日田の仙境に宜園を守る事能はざりしと言へるに對して、「九桂草堂隨筆を讀む」（內田銀藏、史林）が廣瀨家の長生の家系なりし事より旭莊の祖父及父の尊敬すべき人物なりしを語り、淡窓旭莊が兄弟の性格を評して、淡窓の謹直なりしに反し旭莊の豪邁にして濶達なりと言へるは互に相參照すべきなり。僧侶の傳記評論に於ても觀るべきもの鮮からず、中には「傳敎大師と弘法大師との關係」（上杉文秀、無盡燈）は辻博士の「顯戒論選述の理由に就て」の說に反對して、傳敎の顯戒論選述は堂々たる意義の根柢より來り、其敎義は三一傳實の法門を以て最要項となしたるものにて、泰範の去就といふが如き一時的感情の發作に非ず、顯密調和の研究を中止したる傳敎が其本願たる純大乘獨立の活動を始め以て大乘戒壇設立に及びしなりとし、「安然和尙事蹟考」（橋本進吉、史學雜誌）は悉曇藏の著者として不朽の名を留めし五大院安然和尙の外に、同名異人の安然ありし事を指摘し、我が安然は承和八年に生れ、寬平の初年に示寂し、其入唐の企圖は遂げられざりしも、爲めに修學上の一時期を劃し、こゝに始めて胎藏法、金剛界法を學び、顯密兩敎の奧秘を極め、元慶寺に傳法灌頂を受けて得意の項上に達せりとし、其著作、師資、遺跡を說き、修學と著作と受法と傳法とに始終せる學徒の生涯を闡明し、生前よりも寂後に尊仰せられしは一に其著述によると論じたり。「藏俊に關する研究」（大屋德城、無盡燈）は平安朝末興福寺の碩學藏俊の撰述を研究し、左府頼長が彼より因明を聽きし事を說き、因明に於ては鎌倉時代南都佛敎の先驅な

りと斷じ、「善導大師の捨身往生は史實なりや」（圓田宗惠、史林）は善導大師二人說を排し、捨身往生は史實に非ずして彼は正念往生せりとし、「覺如上人とその時代」（山名哲期、六條學報）は親鸞、蓮如兩上人の中間にありし覺如は、存覺の對外的施設に於て法門の外的發展を試みしに對し、對內的法門統一の書策に全力を注ぎたりとし、「夢窓國師」（辻善之助、史學雜誌）は足利尊氏と進退を共にせる國師が尊氏に勸めて日本全國に安國寺利生塔を建て、更に天龍寺を草創して後醍醐天皇以下元弘以來戰沒將士の冥福を祈らしめし事を說き、貞和五年前後、直義と師直、尊氏と直義との確執に際し其使僧をして和睦の周旋をなさしめ、正平三年南北朝の和議を圖りし事等其政治的手腕を說き、しかも國師は自ら好んで權勢に接近せんとせしに非ず、弟子の養成に勢め武將と深交ありし外に、朝廷の信仰をも博して、佛敎史上に比肩するものなき品格、手腕、性質を備へたりとせり。更に對外關係の方面に眼を轉ずれば「蒙古襲來に就いての研究」（八代國治、史學雜誌）は、文永役の際大友賴泰の部下が賊徒五十人を捕虜として上洛せる事、幕府は異國征伐の爲めに鎭西中國の武士の外大和國寺僧と國民とを徵發せる事、弘安役については賊船が長門海岸にも別働隊として來寇せし事を說き、最後に、增鏡の文句を解釋して身を以て國難に代らんとの御祈願を伊勢神宮に致されしは龜山上皇に非ずして後宇多天皇なりとせり。これに對して「弘安の御願に就いて」（龍肅、同誌）は增鏡の文句は解釋によりては天皇とも上皇とも見る事を得べしとなし、大宮院と上皇との御關係は、天皇と大宮院とのそれよりも深密なりし事より見て、特に御勅草の願文を女院が御覽ありし事實は、餘程御親密なりし方の御筆なりしを思はしむとて、天皇說が決して確定的のものに非ずして上皇說と共に猶研究の餘地ありとなし。「弘安御願と通海僧正」（篠原昌三、歷史と地理）は伊勢太神宮法樂寺の通海權僧正の弘安九年參詣記と續門葉集に見ゆる通海の和歌とを提出して天皇說、上皇說の解決の一史料たらんとせるありて此問題は未だ解決されず。「明成祖より足利義持に贈れる勅書に就いて」（淺野長武、史學雜誌）は永樂六年十二月廿六日附の勅書を考證し、善隣國寶記に收むる同年十二月廿一日附義滿弔祭のための勅書と併びて發せられしものにして、義滿の死去によりて再び活動を開始せんとせし倭寇の勦捕を求めしものなりとしたり。「豐太閤の書狀につきて」（三浦周行、史林）は新に發見せられたる九月九日附菊亭晴季以下に宛てたる秀吉の書狀案に對して研究を加へ、元祿元年七月大政所の危篤に際し、名護屋陣より歸京したる彼が其喪中にも拘らず、九月十日再び西下せんとしたりしかば、後陽成天皇深く御軫念あらせられ勅使を以て本年中逗留すべきを諭さ

しめ給ひしに對して奉答せるものなりとし、勅留の切なるものありしに拘らず、僅に二旬の延期をなして出征を敢行したりしは部下の誤解より士氣の阻喪、作戰の齟齬を來さん事を恐れたるものなりとし、「豐太閤の對外的壯圖と共敗因」（同人、中外新論）は地圖海路の不案内、兵員船舶の不足の外に、士氣の阻喪も見逃すべからずとせり、「加藤清正の間島進入に就て」（竹内榮喜、史林）は清正の兀良哈侵入の目的か日本の武威を輝かす事と兀良哈の侵略に憾める國境鮮人が共産意を要望せる事との外に、良好なる領土を獲得せんとする企圖及び明國侵入路の偵察ありとし、兀良哈の所在は不明なるも、哈爾巴通河及海浪河の谷地は往昔大なる住民地たりしとして、城子山附近が其職蹟たるべしとす。以上共に文祿役に關する研究なり。「鎖國の性質及其變化」（井野邊茂雄、歴史地理）に就ては幕府の鎖國は初め禁教の手段として貿易を縮少せんかために葡西兩國の渡來を拒みしかども、長崎港のみは廣く海外諸國に開放したり、當時支那和蘭以外の諸國の渡來せざりしは、彼等自らの任意の行動なりしか、幕府の季世に至りて漸く變化を來し、寛政四年に至りて蘭西以外の船舶渡來を拒絶し、文化二年に通信通商國を琉球、支那、朝鮮、和蘭の四國と限定し、同十年に歐洲船渡來を禁じ打拂を令したるものなりとて鎖國の性質に三次の變化あるを言ひ、鎖國の性質は寛政前後によりて區別すべく、和蘭以外歐米諸國の渡來を拒み打拂ふ事が寛政鎖國令の規定なりとする史家の見解は正鵠を失すと論駁せり。「工藤平助亜に赤蝦夷風説考」（海老名一雄、同誌）は林子平の海國兵談に多大の寄與する所ありし共友工藤兵助及其著赤蝦夷風説考を説明し、其開國説は濟經的立脚地より立論せられ殖産富國の精に滿ち、啻に開國説の濫觴たるのみならず、初期開國論の標本的産物なりとなせり、「我國に保存せられたる古代土耳其文字」（中目覺、尚古）は北海道小樽手宮の洞穴内の岩に彫刻されたる所謂アイヌ古代文字なるものが、古代土耳其文字にて綴られたる靺鞨語にして、部下を率ゐ大海を渡りて闘ひ此洞穴に入りたりと云ふ文意なりとし、更に「靺鞨語墓誌について」（同人、同誌）及び「北海道手宮洞穴の靺鞨墓誌について」（同人、歴史と地理）に於て此洞穴に白骨の存在せる事より推して、此彫刻を靺鞨語墓誌と名づけ、此墓誌は阿陪比羅夫の肅愼征伐と關係を有し、始終東方に向ひて經濟的發展を試みし靺鞨人の移民團が比羅夫等と戰ひ、戰死したる族長の遺骸を葬りし事を語るものにして、齊明天皇六年のものなりと斷ぜり。

第二に社會文化史的研究の方面にありて、「平安朝文化と庶民階級」（西田直二郎、史林）は平安朝時代に於ける地方民の京都在住及び都市人民の地方移住は文化の傳播と攝取とに重要なる意義

を有し、平安朝文化は其淵源地が一個の都市にありし爲め單調にして庶民階級が享受せし文化も貴族のそれと同性質のものながら貴族の粉飾的形式的奢移的なりしに對して實際的の色調を帶び、貴族文化と庶民との調和は一は賑給優恤の思想にして二は庶民の模倣を擧ぐべく、三は宗教的信仰が階級的區別を輕めし爲めなりとせるに、「平安朝の文明と儒教」（勝水寛行、東亞之光）は古代よりの命名法が平安朝に入りて儒教の影響を受けて道德的意義ある文字を使用するに至りしが、國民の道德思想を變化するまでには至らず、本來の國民道德が儒教の刺戟によりて覺醒せしなりとし、儒教の影響は更に史書の修輯事業となり、講學の風を興し道德的生活を開拓し、佛教と共に平安文明の根柢をなせりとせり以上は共に平安朝文化に對する考察として擧ぐべきものなり「都市としての鎌倉」（川上多助、史林）は、輕朝の鎌倉を根據地と定めし理由は源氏と史的緣故深き事、地勢が軍事上の要害なりし事の外に、萬一の場合に再び安房に逃れんとする用意にありたりとし、鎌倉の人口は不明なれども武士が中心勢力をなせし事は疑ふべからずして、京下りの材幹ある人々、樂人工匠等及び僧侶の數も可なり多かりしなるべく、初め幕府の重職が市政を管理したりしために別段に職名もなかりしが、中葉に至りて保檢勸奉行、地奉行を置き、平安京に行はれし保制も採用せられて保々奉行人あり警備、道路の保全及取締、僧侶の取締、諸國より集合する人々の追還の事を掌りしが如く商人の數、住所を一定せんとする幕府の精神は座の組織を促す原因とならざりしかと言ひ、鎌倉は幕府直接監視の下にありて土地所有者には特別の優遇をなし、住民に對しても始めは特別の課稅なかりしが、南北朝時代以後に至りては種々の課役あり、關稅の如きも發達せりと言へるは、「東山時代の京都」（西田直二郎、歷史と地理）が遊樂宴遊の歡樂境たるものあれども其市區の形貌は慘憺たるものあり、上京下京の對稱が一般に用ゐらるゝは此頃より著しく目立ち、一般都市としての形貌が上と下とによりて大差あり、上京が公武居住の群居にして、是等に物資を供給する商賈の店肆ありしに對し、下京は商賈と工人との居住地たりきと言へると共に、我國中世に於ける二大都市の研究として見るべく、「服飾に現はれたる室町時代の社會的傾向」（櫻井秀、史林）は服飾構成の慣例及び服飾に關する趣味が公武混融したる事、其中間的發達、前代まで其機微を示さゞりし上下の制及び羽織袴の慣例の如き近代的特徴の發現を指摘したりしは、「室町時代に於ける猿樂の勃興に就て」（田中義成、帝國文學）足利義政が世阿彌の容色を愛でゝ之を寵幸し且猿樂を愛好したるためなりとせると共に此時代に於ける社會的風潮の一斑を窺ふべく、「德川時代に於ける封建的都市の發達」（瀧本誠

一、經濟論叢）は大名城下が一般に、經濟上分配及消費の中心となりしは士農分離の結果と見るべく多數の侍をして都市生活の便を知らしめ、我國各地方に三百に近き大小都市の發達を促し、商工業の成立を得しめ、農村の疲弊を維持したる唯一の大原因にして、此封建的都市の發達は古代の村落經濟と維新後の國民經濟との中間に介立する現象として顧る重要にして西歐のそれと酷似せりと言へり、「足利莊の文化と皇室御領」（八代國治、歴史と地理）は足利莊の發達が源義家の別莊地として足利源氏の勃興によれども、其文化を促したるは義康以來の事にして、足利莊が皇室御領たりし關係上、義康及び其子義兼の二代、鳥羽後白河兩帝、美福門院八條院の兩女院に奉仕して京都文化に接し、學問教育の必要を感じ、京都の文化を移植したりしことを說き、足利學校の創立には諸種の說存すれども義兼の建立とする說に贊し、義兼の外戚に大學頭文章博士日野有綱のありし事及び皇室御領のために京都に奉仕し、其文化に親しみし事を以て其理由とせり、前者と共に都市の發達、地方文化の傳播と言へる問題に關して或半面を語るものなり。「德川時代に於ける工商階級」（瀧本誠一、國民經濟雜誌）は極めて蔑視されながら工業は或程度まで尊重すべきものとせられしは封建的軍事思想より割出されしものなり、されども元祿以後に至りて奢侈淫靡の風盛んとなるや商工階級は表面に現はれたるよりも、實際に於て意外の潛勢力を有したりとなし、「遊民考」（同人、經濟論叢）に於ては遊民を分類して武士階級に屬する侍、浪人の如きもの、社寺支配に屬する居侶、禰宜の如きもの、一般下層社會に屬する人消、鳶人足の如きものゝ三とし、これら總數一千萬人に近き遊民は總人口の約半數に達し、德川時代に於ける日本人は如何にして生活せしやの問題生ずれども、座食を得意とせる此時代は勞働を神聖視する新世界と劃然たる區別のある舊世界なりしとなし、近世に於ける中流以下の社會研究として併せ見るべきものとす、更に時局の影響を受けたるものとして「百姓一揆」（同人、同誌）あり、其原因は領主又は農官の暴虐にありて租稅の重加、飢饉の危懼の如きは單に其誘因たるに過ぎず一揆の形式も大体同一にて初め壓制に對する救濟策を講じ其嘆願の容れられざるに至りて始めて强制的手段を取り、出米る丈多數の農民を結束すれども、其範圍には自ら一定の制限ありて、一支配地内か一領内に止り、無限に擴大する事なく、十中八九まで一揆の成功を見たりといひ、「米一揆」（本庄榮治郎、同誌）は享保、天明、天保、慶應の打毀を述べ、何れも米價の暴騰に苦める細民の其困苦に堪へずして一揆を起し、米商富豪を襲撃し低價强買の不法を敢てし、官憲の應急策としては幕府自ら米錢を施與し廉價販賣、暴徒逃捕をなし、富豪及特志家をして窮民を救恤せし

め、米價調節策を講じたるを指摘せり。

更に目を法制經濟に關するものに轉ぜんに、「法制を中心とせたる江戸時代史論」（吳文炳）は、法制を中心として時代の社會的觀察を試みたる點に於て、新味ありと謂ふべく、家康の武家法度に現はれたる壓制主義は建武式目以下室町時代乃至戰國時代諸家の法制の影響を受けたる諸侯制御策なりとし、此國家統一幕府維持の思想が我國民文化の發展を阻害せりとて鎖國問題を論じ、そが一種の國產奬勵策たりしも工業的發展を阻害し、新思想の輸入杜絶となり、國民文化發達の遲延となりしと論じ、新家族制度は幕府の對大名策を改めて領地沒收を避け、長嫡子を重んじ全領を繼承せしめたる機宜の政策が、幾變遷の後に漸次發達確立せりと言ひ、幕府の經濟政策の一も見るべきものなかりしは爲政者に經濟策を云爲するものなかりしなりとせしが、更に「江戸幕府の刑事政策」（同人、歷史地理）に於て家康は德川氏の持續に全力を注ぎしを以て、江戸時代の法制は國民を對象とせずして、幕府自身の爲めに割出され、武家法度は對大名策を主眼とせる事を力說し、徒黨一撥等の團体に關して頗分過敏なりし幕府は其刑法主義に於ても豫防主義を執り、法律の條文よりも制裁力を主とし、微細なる犯罪にすら極刑を課し、連帶責任主義を採用せりと言へり「緣坐法論」（三浦周行、京都法學會雜誌）は緣坐法の由來は古く我國中古の律に見ゆ、武家時代となりて其武斷的傾向は刑法上にも現はれ緣坐法の適用さるゝ犯罪の種類と範圍とは擴大され、貞永式目にも採用されし所なるが、戰國時代以後は刑法上にも殘忍殺伐の氣風現はれ緣坐連坐の法を盛んに適用し、江戸時代また其餘風を受けて犯人に對する制裁の峻烈なりしは前後其比を見ずされども其中葉以後漸く其社會風敎上の弊害を認め、大宰春臺、德川吉宗、松平定信等によりて修正を企てられ、町人百姓に對してのみ幾分寬宥せられたれども、なほ改廢の明斷に出でざりし理由は、當局者が一般に御定書を以て金科玉條とせし事、武士は社會の儀表なりとて町人百姓よりも重刑を課せし事、重罪犯人の子が成長後を恐れたりし事に基因すれども、亦幕府司法當局としては寬大の方針を執れりとし、此最後の運命を遂ぐべき緣坐法の猶保存されしを、一に立法者の法制史的智識の闕如に歸したり。以上二編は、期せずして江戸幕府の刑法主義の根本思想に觸れたる研究なりと謂ふべし。「高野山領莊園に就いて」（魚澄惣五郎、歷史地理）は高野山領莊園中の著名なるものゝ沿革を概說し、其不輸不入の特權は必ず官符又は院宣によりて保證さるゝを要し、莊園設立に關する立券莊號の手續は莊園亂立防止の爲めに已むを得ず起りし制度なりとし、組織及び莊官を說明し、年貢米運送に附隨して生ぜし倉敷地、問職に言及す、次に見るべきは前年以來問

題となれる座に關する研究にして「座管見」（平泉澄、史學雜誌大正六年十二月號）が「座の起源と其語原」の說に反對して、座は元來組と座席との二義ありとせるに對して「『座』の意義につきて」（三浦周行、同誌）は二義說の弱點及び其史料の解釋について反駁批判し、「再び座に就いて部見を述ぶ」（平泉澄、同誌）は更に前說を改めて座の語源は座席の一義なりとし、轉じて座席を占むる人を指し、そが團體なる時に至りて始めて組の義となるとて、天正二年卯月十日附武田勝頼朱印狀を一人一座の例證なりと引用し、「再び『座』の意義につきて」（三浦周行、同誌）は前者の引用せる史料の一人一座なりし證とならざるを指摘すると共に初期の座の組たるを證すべき史料を列擧し、座の發生後に於ける幾多の變遷を閑却して後世の事跡を混同するが如きは起源を論ずるの資格なしとて自己の研究態度を明かにしたるあり、「座の研究（再び）」同人、經濟論叢）はさきに發表せられし「座の研究」の對象が地方の座なりしに對して、京都の座を研究したるものにして、大抵朝廷、社寺、貴族を其本所とし營業上の利益を圖れるに一致せり、四府駕輿丁座の如きは其一例なりとし、駕輿丁が或種の人物に限られ世襲するに至りしは古からんも四府駕輿丁座なる特殊の組合を組成するに至りしは少くとも南北朝時代に溯り得べしとし、其組織、營業の有樣を說き、賀輿丁たる事によりて得る利益は諸役免除及び專賣權なりとせり。「稿本無盡の實際と學說（池田龍藏）は、たのもしは已に鎌倉時代に存在せりとし、たのもしと無盡との關係につきては此二者を同一なりとせる從來の說に反して、無盡は室町時代に在りて、たのもしに無盡錢土倉を加味したるもの、もと關東地方に發生したらんと言ひ、「稿本無盡の實際と學說を讀む」（三浦周行、史林）は憑支の起源は少くとも鎌倉時代の文書に見ゆたる限り相對的共濟組合に非ずして救濟組合なりとし、無盡と憑支との關係につきては、無盡の起源を室町時代とするは憑支も無盡錢も共に鎌倉時代に存在せし事を認めたる著者としては史料に拘束せられたる觀ありとして著者に今一段の研究を促し、別に「頼母子の起源と其語原」（同人、經濟論叢）はそれと類似の無盡錢土倉が鎌倉中期に存せし事、頼母子なる名稱の意義は他人の好意同情に依頼し其助力を求むる意味に於て憑の風俗より又其懸錢が擔保利息附なる點に於て無盡錢土倉の影響あるべしとの二方面より解釋して其起源は建長より以後、無盡の名の生ぜしは永仁德政令より後の事と推定し、頼母子は土倉の如き營業的のものに非ずして救濟的なり、個人事業に非ずして組合事業なりと斷ぜり、民間金融機關として一部の經濟界に多大の便宜を與へし無盡及頼母子に關する新しき研究として併讀すべきものとす。「天保度の米價調節」（本庄榮治郎、同誌）

が主として米價引下策なりし事を說き、人爲的調節策は効果なきに非れども、作柄の豊凶は米價の暴騰暴落に甚大なる影響を與へて人爲的手段の効果を粉碎するものなりと言へり、「大阪に於ける舊時の鹽問屋」(同人、同誌)は德川初期の鹽問屋は島鹽問屋赤穗問屋、離島問屋の三鹽問屋あり、獨占の弊甚しく諸商賈中最最も驕奢なりきとし、問屋と仲買との關係、取引方法、需給の狀態を述べ維新後の鹽商組合の成立を說き、「京都に於ける舊時の鹽屋仲間」(同人、同誌)は京都に於ける鹽商人は既に慶長年間に存し、維新期までの鹽仲間は、元鹽屋、他所買鹽仲間、地買鹽仲間の三仲間にて鹽販賣は此三仲間に限り、以外の者は造醬油屋株に屬する場合は製造用潰鹽を買入るゝ特權あれども、販賣をなす事は絶對に許されざりしとて、德川時代の鹽に關する制度を明かにしたり。

第三には學藝の方面に一瞥を與へん。「文藝復興期の儒風」(三浦周行、史林)は朝廷に於ける好學の風は、後水尾天皇を其中心とすべく、此時代に於ける舟橋、伏原兩家の人々は進取の氣象に富みしが、進講者としては兩家の侍講の外に民間の處士をも召され、五攝家以下朝臣の間には圖書の貸借も盛んに行はれ、學問講も組織せられ、公卿側の學問に對して一般に進取的意氣を見るべく、當時の朱子學派、王陽明學派、古學派は共に我が神道及び國

史の研究に多大の興味を見出せしが、家康の不自然なる對朝廷策の爲めに、文藝復興の機運は頓挫を來せりと言へるあり、既記「後光明天皇の御好學と朝山意林庵(再び)」と併せて德川初期の文藝復興に就くの史實を語るもの多し。數學に關しては、日本數字史(藤原利眞)あり、著者が眞に畢生の精力を傾倒したる成果にして我國古代よりの數學の發達を叙したるもの大陸數術の傳來より近世和算法の完成に至るまでを細說して從來闕如せる此方面の沿革を考ふる上に尊重すべき著作なり之れと共に「日本數學發達の由來」(三上義夫、史學雜誌)は和算の眞の發達は德川時代にして、明の算法統宗、元の算學啓蒙の影響の外に戰國時代の築城術、秀吉の檢地、水利の發達を看過すべからずとし、和算は支那の算書を改作したるものにして天元術より筆算式の代數を作り、日本數學の根幹を成就せるは特筆すべし、算木及算盤は和算發達史上重要なる地位を占むべく、我國數學は主として實用的方面より發達し、更に興味によりて異常の發達を遂げたり、されば和算家は換地に關係せし役人、天文方の官吏の外に農家商家の徒の趣味より來れるもの多しと言へり、「伊能忠敬が測地事業に成功したる所以」(大谷亮吉、同誌)は第一に寛政年間に於ては麻田剛立一派の爲めに精密にして簡便なる測量器が完成され、天測地量に關する從來の缺陷が補充されし事、第二に百折不撓の大精

神を有する忠敬の人と爲りと學識、第三に幕府の威光は諸侯を壓し、諸侯の領地に公然幕吏を派し得たる事、第四は露國が北邊を脅かし、事にありとなせり。美術史に關しては、「畫人傳說の解釋」（福井利吉郎、史林）が光琳及破笠の傳說を提へ來り、其解釋によりて畫人の閱歷と藝術、其時代を窮知し得べく、畫人生活の奥所に入るは得されども、其門戸を推知する鍵たるべしと論ぜるを見たる吾人は、「九華草堂隨筆を讀む」の中に於て廣瀨淡窓旭莊兄弟の性行の評說を見、少壯時と老成時代の性格の相違は、傳記研究に際し意を用ふべき所にして或年齡の時の事件を以て他の年齡の時にまで推し及ぼす事の危險なるを注意せるに想到せざるを得ず、以て傳評研究の好指針とすべし。「大武探元に就て」（薩懸靜也、國華）は諸侯の御抱繪師中には往々拔群優秀なれども中央畫壇に出づる機會を失ひし爲めに其名の擧らざるものありしを言ひ、鹿兒島藩に於ける大武探元の如きは其一例なりとて、其生涯を描き、其遺品につきて見るも、本朝古畫の粹を拔き、支那古名畫に範を取り、探幽に私淑せしと雖も、徒らに祖述せるに非ず、透徹せる批評眼を有し彼を無智とさへ嘲りし事もあり、門人の養成に努力せしは特筆すべしと述べ、「狩野山樂の研究」（小林源太郎、中央美術）は其技倆の裏に潛む力に於ては永德に劣れども、永德の繪が智意的なるに反して、山樂の繪は情意的にして

彼が北畫の遒勁を押し進むれば、此は南畫の技巧ありとし、「德川末の出版界に於ける繪師と作者」（薩懸靜也、史學雜誌）が繪師と作者との暗鬪の中にありて出版者は其調停に苦心を拂ひ、漸く出版して大喝采を博すれば、忽ち幕府の忌諱に觸れし出版界の事情を述べ、幕府が作者及び繪師を拘束して、其挑梁跋扈を防ぎし事は風教上大なる効果ありしならむと說けり。

第四は思想、信仰、宗敬に關するものなり。「皇國神典至要鈔」（寛克彥）は神典に對する特有の議論を聞くべし。「日本大黑神考」（喜田貞吉、歷史地理）に於て、大黑天は大國主神、摩多羅神、金毘羅神、荼吉尼天、宇賀神、毘沙門天、辨才天等と混同されて福神となり信仰せられしが、大國主神に習合せられたるもの優勢にして、他の諸天諸神も全く大黑天より分離し、荼吉尼天、宇賀神は稻荷神に收容せられ、毘沙門天、辨才天は別箇の福神として七福神に列せらる、其神像はもと面相勇猛なりしが、途に短軀矮身の福相に改り、其信仰は夷神の流行に伴ひて、俗間を風靡し、日本に於て諸種の信仰と習合して成れる新なる福神として崇敬せらるゝを說き、「天皇と神社の祭神」（八代國治、國學院雜誌）及び「天皇と神社の祭神に就て」（同人、同誌）は天皇と神社との關係は上皇と神社との關係とは相違ありて天皇を祭神とせる神社の稀なる事、天皇御在位中は神社に行幸あるとも寶殿親拜の事見ざる

は、卽天皇の御位は天照大神の御位にして、天皇卽現御神なりとの我國固有の信念の爲めなりと說き、「大三輪神社中古迄の神殿考」（西川玉童、同誌）は近古以來、本社は上古より神殿なしと言はれしも、そは大三輪三社鎭座次第に社殿なしとの妄斷を下しを誤信せる爲めにて、中古までは宮殿樣式の神殿ありしを主張す、「本邦に於ける祖先崇拜の形式及意義の變遷」（春山作樹、哲學研究）は我邦の祖先崇拜の起源は古きも、今日の精神及形式を備ふるに至りしは比較的新らしく、其間に種々の變遷もあり、佛儒兩敎の影響もあり、封建制度の助長もあり、其將來の形式及び意義に就ては、常に感謝の念を以て祖先を追懷し、其遺訓を守り、宗名を尊重し、子孫の繁榮を謀る事を以て最要とし、「民族心理に著はれたる祭神思想の變化を論ず」（橋口長一、人類學雜誌）は塞神祭卽道饗祭の思想は伊弉册尊が黃泉にて崩御ありし穢に淵源すれども漢土文明の輸入と共に道祖神及び疫神は塞神思想と習合し、鬼魅を饗へ止め、京都に入らしめざるものとし、今義解は此變化せる道饗の思想を採りたるを、平田一派に至りて此誤を指摘したるなりと言へり。「平安朝神道の一側面」（河野省三史林）は平安朝時代には未だ本地垂跡說を飾るに足る程の僧家の學說なかりしが、こゝに山王神道と兩部神道とは、延曆寺と東寺及金剛峰寺とが互に其勢力を擴張せんが爲めに神祇の威力を借りし運動と相關連して發達進步したるものにして、伊勢神道の餘りに佛吳に富む事は其成立年代を推知すべしとなし、「神道に於ける反本地垂迹思想」（四田直二郎、藝文）は我神祇を以て道の根本となし、其枝葉花實なるものが支那天竺の二敎なりとする三敎枝葉花實說も稱すべき思想は兼倉の唯一神道に淵源せるが如く又本地垂迹說を正反對に本地を神、垂跡を佛とする跡高本下の成道とも稱すべき思想が太平記及び舞の本に見ゆるが太平記のものは後代の竄入にしてこれも卜部神道說の影響によるべしとなせり共に神道研究の好題目たるを失はず、「日本の佛敎」（境野黃洋）は佛敎の傳來より鎌倉時代に至るまでの佛敎を八章に分ちて說きしものにして、日本佛敎渡來の年代につきては法王帝說の記事なる欽明戊午年を攻究し又書紀の紀年を訂正し、欽明七年に當るとし、佛敎が公然渡來せる年なりと斷ぜる等見るべく、「眞智上人時代の高田派と本願寺」（牧野信之助、史林）は高田派眞智上人が大坊主分に擁立せられて越前に來りしは、本願寺一揆の掃蕩に全力を盡したりし朝倉氏の保護を恃みたりし爲めなりしが、其地盤獲取は常に受動的にして、進んで人心を收攬する事なかりしかば一朝にして本願寺の爲め其根據を奪取せられたるを叙し、「慶長年間の京都耶蘇信徒の墓碑」（新村出、同誌）は京都北野なる延命寺及び成願寺より發見せられたる四基の墓碑を說明し、「南

靈寺興廢考」（同人、同誌）は京都の南靈寺は天正四年より十六年まで存立し、其前半期が全盛にして、後半期は衰微の時代なり慶長九年再び京都に教會堂を建つる事を認許せられしが、此新南蠻寺は當代記及び新に發見せられし墓碑の位地より推して北野邊にありし事は確からしく、今一ケ寺四條邊にありしか、或はこれは禮拜堂なりしやも知るべからずとせり。「文學に現はれたる我が國民思想の研究、平民文學の時代上」（津田左右吉）は公家及び武家の文學が平民に移り文化は平民の間より起りし事を述べ、平和時代の武士道に論及して、主從關係は戰國時代よりも疎遠になりしが如く、平民の間にも面目を重んずる思想生じたりしとし此時代の人生觀はあきらめを以て始終せるが如く、自然界に對しては明るき陽氣なる氣分を以て接し、滑稽的態度を認むべしとせり。而して「本居宣長と櫻花」（柏原昌三、歷史と地理）が宣長の櫻花の歌は多きも、史家の言へるが如く落花の高潔と日本人の犧牲的精神とを比較したるものと認むべき意味のものは一もなく彼の華生の事業が日本國民性の研究にありし事を思ひ合するも、かの有名なる山櫻の歌も、朝日に映ゆる其花の容姿が淡白率直にして平和なる事が、民性に合致せるを詠ぜしものならんとせるは微細なる事の如きも、見逃すべからざる見解なりとす。

更に視界を改めて歷史地理に關するものに及ばんに、「河内國府遺蹟最古の住民」（喜田貞吉、歷史地理）は國府遺蹟の層位的觀察によれば、上層のものは土師部なる彌生式民族れなども、下層のものは全く趣を異にし、恐らくアイヌ系統のものなるべく、發掘せられたる遺骨も必ず同一系統のものなるべしと主張し、此遺蹟最古の住民がアイヌ系統の民族なりきと判定せり。「怡土築城考」（大類伸、歷史地理）は怡土城の築造は強硬なる對新羅策と深き關係を有し、積極的國防の一策源地にして、高祖山を以て其城址に充つべく、城内に廣濶なる空地の存する事は怡土城の特色と認むべく、そは城内に兵營、倉庫、寺院等の建物ありし事と萬一の場合に附近住民の避難所たらしめしによるべしとし、「河内金剛山城考」（大熊慥平、史學雜誌）は楠木本城は現時の切山城卽ち上赤坂城にして、元弘元年始めて構築したる赤坂城は卽ち下赤坂城なりとし　金剛山城の結構配置を綜合すれば轉法輪寺の保壘團、千早城の保壘團、楠木本城の保壘團の三大保壘團を巧みに構築配置せりとて、實地踏査の結果より考察せり其他「長州藩に於ける新田の開發」（橋村博、歷史地理）は防長二州に於ける新田開發の著しきは玖珂郡にして、今日防長米の主要産地たり、其土壤は花崗岩を母岩とせるを以て、地味良好他日優良種たる防長米の本場と化したるは勿論なりとて新田開發が國土開發に一大意義を有する事を認めたり。

最後に史料に關するものを擧げて筆を擱かんとす。「度會家行の勤王に關する史料」（大西源一、史林）は度會神主家行が南朝の柱石たる北畠親房と思想上最も密接なる關係を有したりと言へる「南朝の隱れなる勤王家」の說を裏書するが如き正平三年の目安に就て研究を加へ、家行が單に文筆上の勤王家たるのみならず軍事上に於ても亦赫々たる功勳を有せる事を證したるは、既出「豐太閤の書狀につきて」「明成祖より足利義持に贈れる勅書に就いて」と共に、新に發見せられたる史料に對する攷究にして、「關東往還記を讀む（北條時賴の廻國說に及ぶ）」（大森金五郎、歷史地理）が關東往還記が西大寺叡尊の筆にして、弘長二年の記なる事を內容より推考し、稱名寺が既に存在せし事、北條實時の家族子弟の狀況を見、七月十三日の記事より見るも時賴の廻國說は認め難しとせるに次で、「關東往還記及其著者」（鷲尾順敬、同誌）出で、建長三年四月十六日草の西大寺結夏安居の表白文跋、鎌倉鬼寺上宮太子開光の表白文末記等よりして、弘長二年の記事なる事を認めて前者の說に贊し、弘長二年は吾妻鏡の記事缺くる年なるを以て、其點に於て貴重なる史料なるを說けり、「眞宗法要研究號」（六條學報第二百號記念號）に「『眞宗法要』成立考」（薗田宗惠）以下あると共に、何れも史料に關する新らしき研究なりとす。史料の出版せられたるものは前々年に比して少さやの感あり。〔大日本史料〕に「第四編之十六」「第六編之十二」「第十二編之廿」を、〔大日本古文書〕は、「追加六」「幕末外交關係文書九、十」を出し、〔史料通覽〕は「山城記三」「兵範記二」を出し、〔國書刊行會〕は「上田秋成全集」「正續本朝文粹」の外に「本朝通鑑」の刊行に着手し、〔國史叢書〕は「關白傳記」「天正南部日記」「藝侯三家誌」「北肥戰誌」「吉田物語」を、〔史籍刊行會〕は「鳥取池田家書類」「奇兵隊日記」を出せり、其他「滿濟准后日記」「法隆寺金堂日記」「羅山文集」の活刷に付せられ、地方史料にありても、「水戶藩史料」「會津史料叢書」の出版せらるゝあり、「中尊寺大觀」「對外史料美術大觀」「日本歷史圖錄」（完成）は史料を寫眞版に附して出せるものとして見るべきなり、而して「日本經濟叢書」と「國譯大藏經」の完成せられたる亦學界の爲めに慶賀すべし。只國史界の明星たる、吉田東伍氏、重田定一氏、岡部精一氏の物故せられたるは深く惜むべきなり。〔中村〕

朝鮮史の方面に於ては、先づ言語學的研究には「新羅及京城の名義」（清水元太郎、藝文）の從來月城、桑、白、等の語原に基づくとせらるゝ新羅の名に對し、三國史記に見ゆる徐耶斯盧斯羅が轉訛せしならんとの新見解を提出し、又京城は根の意ならむことを考證せるあり、特種問題の研究に於ては「朝鮮慶州邑城に就

て」（小田省吾、史林）は近年發見せられし慶尙道地理志、同續撰地理志に基きて慶州邑城を考へ、輿地勝覽の記事を補正する所あり、「朝鮮白丁考」（今西龍、史林）は李氏朝鮮に於て賤民の一稱なる白丁の稱呼由來を論じ、高麗朝以來才人禾尺と稱せしものゝ、世宗王時代より白丁と改稱し、新白丁と呼ばれしが、間もなく平民本來の稱たりし、白丁の稱呼は全く平民より去りて新白丁にのみ殘り、且つ單に白丁と稱せらるゝに至りしことを說き、これに次いで「朝鮮の白丁と我が傀儡子」（喜田貞吉、史林）の兩者の類似點を比較したるあり、「海東高僧傳に就きて」（同人、史林）は稀世の珍本覺訓奉敕撰の此の書の三國史記、三國遺事に次ぐべき價値あるをいふ。高麗に關係せる研究には「高麗太祖の薨後に於ける王位繼承上の一悲劇」（池內宏、史林）「高麗末に於ける明及び北元との關係」（同人、史學雜誌）「高麗辛禑朝に於ける鐵嶺問題」（同人、東洋學報）「高麗恭愍王朝の東寧府征伐に就いての考」（同人、同誌）「高麗太祖訓要十條に就きて」（今西龍、東洋學報）等あり、第一は太祖薨後の儲貳問題の紛爭せる史實の高麗史世家諸臣傳に曲筆あるを指摘し、第二は恭愍王の十七年明が元の大都を陷れて以來、辛禑王時代に於ける高麗權臣の處を宗主國とすると共に北元にも親しまむとしたる事情を論じ、第三は辛禑王時代に於ける高麗と明との國境問題に就て鐵嶺

の今日滿浦鎭の對岸なる黃城にして、咸鏡道南邊の嶺路に非ざることより、黃城に於ける鐵嶺の稱呼の起原由來、明に對する當時の高麗の態度を論じ、第四は東寧府の今日の邊石哈達の東方なる五女山なるを指摘し、第一回の兀剌山城、第二回の遼陽城攻擊なりしことより目的と攻擊地の不一致を來たせしことを闡明し、第五は所謂太祖訓要の顯宗王代若しくは之に接する前後時代に僞作されたることを論證し、高麗史が之を揭ぐるの不注意なるをいふ「高麗普覺國尊一然に就きて」（今西龍、饗文）は三國遺事の撰者なる一然の、佛國寺事蹟記に記さるゝ遷逃年代及び撰述者の名は假署なるを論ぜり、「那波」

東洋史　昨年の東洋史界は所謂支那問題の世人の視聽を惑さつゝある折柄さて、直接之に觸れたる時事問題は勿論更に溯りて支那歷史の學術的研究によりて之が論說を試みむとせるものも少なからず存し、露西亞の紊亂より延きて滿蒙蒙古の諸問題研究の機運を促進するなど、活躍の盛況洵に驚くべきものあり、其時事問題を論じたるもの、「對支勢力の眞發展」（內藤虎次郎、東方時論）は我が國の輿論が大體に於て南北妥協に傾けるも、我が國としてはむしろ此の問題に餘り多く顧慮せざるを宜しとすと警告し、眞個日本勢力の發展は寧ろ國民個々の力に俟つべきを論じ、「支那の南北分立に就て」（服部宇之吉、東亞の光）「南北妥協の機運

動く」（吉野作造、東方時論）「支那の弊政問題」（河津遷、同誌）「斯く南北妥協を觀る」（服部宇之吉、同誌）等各其の專門的立脚地より論述する所あり。次に一般的の論議乃至說述に於ては「支那學の沿革」（田中萃一郎、東洋學報）は第十七世紀以來耶蘇會宣教師によりて開拓せられたる支那學の Semedo を得て益々正確なる研究と理解とを見たり、此の紀の中葉以後は專ら學者の手に移り Martin の歸歐以來一新生面を展開し、一六五五年 Amsterdam にて支那地圖の創刊あり Michael Boym の支那本草志以下 Ferbiest, Intarcetta 諸氏の支那學研究促進の機運を作りたるを述べ、「輓近に於ける東洋史學の進歩」（羽田亨、史林）は之に反して最近西洋の東洋學者の學界に致せし注目すべき寄與として古代トルコ語、三種の印度歐羅巴語、西夏語、諸宗典の新發見、延きて、西域諸國の人種問題ソグド回鶻文化の東方に及ぼせる影響を紹介す、稀覯なる史料の紹介に「大英博物館スタイン氏發掘品過眼錄」（濱田耕作、東洋學報）あり。大正三年夏同博物館のエドワード七世館の開館と共に陳列せられたる唐五代間葬書斷片、朱漆杯、西漢燉煌國王許出家救書、曹氏祈福疏、唐拓北度寺塔銘拓本、見返に唐代の版畫なる金剛般若波羅蜜經、歸三十字母例、九世紀頃の佛畫銘文、大曆年間の戶籍斷片、莊子斷片、索氏の出なる尼慶惠遺書等重要なる史料に富めることを紹介批評し「支那人の體面觀」（宇野哲人、東方時論）は支那人の重視する社會的典禮、國家的法制、倫理的禮法を說く、若しそれ「支那古代史」（西山榮久譯補）に至りては西洋東洋史學の泰斗ヒルト教授の著述に補註をも加へて譯出せるもの亦好讀物たるを失はざるべし。

政治經濟の方面には、「漢土に於ける國家財政と帝室財政との區別並に帝室財政一斑」（加藤繁、東洋學報）は未だ完結に至らずと雖も、帝室國家兩財政の混同すべからざる所以より說きて、嚴密なる批判を加へ、帝室財政の收入は山澤江海陂湖、園、市肆の各稅を主とし、日賦、苑囿池澤公田の收入、獻物附金及び湯沐邑の租稅之に次げるを一一論證する所あり。「宋代輸入の日本貨に就きて」（藤田豐八、同誌）は趙汝适諸蕃志に見ゆる日本貨を指摘し證し、殊に豐富なる金の話の元寇の動機となりし傳說の必し所會の說ならざるを謂へるあり。「一昨年より斯界の注意を惹ける「宋末の提舉市舶使西域人蒲壽庚に就いて」（桑原隲藏、史學雜誌）も愈々完結し、元の世祖破宋の後直に收益多き外國貿易に着眼し、卽ち蒲壽庚を擧用し、壽庚亦元朝に忠勤を抽でたる經路をば明かにせり。此の篇に關聯して出でたる駁論に對する答辯「藤田君の宋代市舶司及び市舶條例に就いて」（同人、同誌）は彼我論爭の中心問題たる市舶の名稱、市舶使、提擧市舶使、覆聖

寺光塔に關する諸件を論じ、「明初の夏税秋糧」（清水泰次、同誌）亦宋元の制に徴へるものとて、其の初期に於ける內容品目期限時刻等を論述す。又「葡萄牙人澳門占據に至るまでの諸問題」（藤田豐八、東洋學報）は東西史料の抵牾する個所に研究解釋を試み、彼の Fernao Peres de Andrade 來朝の正德十二年なること、之を十三年とするは實に滿剌加使節の來朝と混同視せる結果に出づる謬說なること、Martim Affonso de mello Coutinho の來朝は嘉靖元年にして所謂 Tamao の位置は廣東省城より五十四英里、海頭より九英里なれば、上下川島には非ずして、屯門澳なることより寧波漳州に於ける葡人及び其の居留地問題を論じ、Li Ma Hong の李鳳、Chang Si Lao の張廷ならんことをも推定し、「明時代に於けるマカオの貿易と其の繁榮に就て」（矢野仁一、史林）はマカオに據りたる和蘭人の沿革と其の極東貿易の狀況を敍述せるものにして兩者併せ觀るべし、「經濟思想の「黃宗羲」政治經濟思想」（小島祐馬、經濟論叢）は主として明夷待訪錄に見えたる君主は政治上の機關にして、臣の君に對するは師友の關係なりとの說を「王夫之の經濟思想」（同人、同誌）は主として分配政策に關して王船山の貧富均一主義と尊農壓商の思想とを注意したり。政治經濟に加ふるに文化史的方面より「周末に於ける地方の開發」（那波利貞、藝文）を論じ、漢民族の起原論より殷周文明の地理的範圍と其の性質とを辨じて地方開發機運の促され居る所以に說き入らむとす。

特種の研究として「秦漢紀略の嘆爾旦傳」（內藤虎次郎、史林）は此の書の板本の流布既に稀なるに加へて、敍本には最も注意に値する嘆爾旦傳を逸せることより、其の著者の梁份なることを證明し、これが內容の研究と異本の比較研究とに及び、嘆爾旦の出自を論詳し、又「安石程伊川以來疑問の眼を以て目せられたる「伯夷論」（稻葉君山、東方時論）を試みて、其の叩馬の諫の記事は漢初に於ける黃老家の僞作に出づるものを司馬遷の輕率にも正史に編入せしならんかと看破し、而も司馬遷が普通に史家とのみ考へらるゝも實は寧ろ一種の思想家哲學家なるをいへる「司馬遷の經學」（狩野直喜、哲學雜誌）は孔子の春秋に就きて彼の懷抱せる意見を指摘せり。「文獻上より見たる崑崙思想の發達」（野村岳陽、史學雜誌）を論じては地理的說明の到底不可能なる所以より、莊子列子の記載以前に崑崙山無く、禹貢の記載以後に崑崙國無きを論明し、其の思想の發達を辿りて、崑崙同稷達說、崑崙西藏說、崑崙地球中心說乃至崑崙渾沌說等を批判し、崑崙思想は存するも崑崙山の無きことを論斷せるあり。「正統四年桃渚の倭寇に就て」（瀨野馬熊、同誌）は其の壹岐對馬の島民によりて計畫せられたるものにして、望海堝の復讐戰とも見られ得べきことを

いへるあり。「海都の叛いた年次」（箭内亘、東洋學報）には邵遠平、魏源等の如く至元五年とする者あり、洪鈞の如く十二年とするあり、屠寄の如く十一年とするあり、桑原博士の如く二年説ありて異説紛々たるも信ずべき史籍 Rashid-eddin に從へば五年説の正しかるべきを述べ、「唐以前の福建及び臺灣に就いて」（市村瓚次郎、同誌）は其の史籍に散見する記載より此等地方の開發せらるゝに至りし徑路を闡明し、「休屠王の金人に就いて」（羽溪了諦、史林）は其の佛像に非ずして印度神の一ならんことを健陀羅美術の起原と併せ考へて論證せり。「土默特趙城の戰に就いて」（和田清、東洋學報）「塞民族考」（白鳥庫吉、東洋學報）皆注意すべし、「西藏王薬宗弄讃の研究」（楠基道、藝文）は未だ完編を見るに至らざりしも、支那史乘に見ゆる薬宗弄讃と双贊思甘普との二者の二種の王名に非ずして、蓋し同一人なる Khri-Ldan Srong-b Tsan の同音異字譯ならむことをいひ、其の出生年次の西暦六二七年説、六一七年説、六一六年説の中、六一七年説の正しかるべきを論證すると共に、進んで六五〇年死に至る迄の政治的方面に振ひたる手腕をば考覈し、「扶桑國に就いて」（白鳥庫吉、東亞の光）は南北朝以前の記載に見ゆるものゝ東方日出の神話なるは勿論、南史梁書の現實の國とせることも亦假托に出づるものなることを説破し、「大寧都司の内徙につきて」（清水泰次、東洋學報）は洪武二十年九月に設置せられて翌年北平行都司と改められ、更に保定に徙されて舊名に復したる此の都司の内徙の事情を研究し、吾學編の記述を疑ひ、燕王に内應せしものゝ朶顏三衛に非ずして三護衛なるべきことより、内徙の年次の靖康軍中に在るを斷定し、名山藏等諸書の謬説を訂正する所あり、「二十八宿の傳來を論ず」（新城新藏、史林）は支那バビロン印度各地方に於ける此の思想の存在を追及して、其の發祥地は古代に於て牽牛織女の傳説ありし地域にして、北緯四十三度内外の地域に暫く停滯して後、先つ印度に入りしものならざるべからざれば、蓋し支那にて周以前に設定せられ、春秋中期に中央亞細亞を經由して印度波斯亞剌比亞に傳はりしものならん、との結論を提出し「歲星の記事によりて左傳國語の製作年代と干支紀年法の發を論ず」（同人、藝文）は、左傳國語に見ゆたる拾壹个處の歲星の記事をば現代の發達せる天文推步法によりて之を逆算し、更に分野及び十二次を考察して、記事と計算との差違を知り、二書の歲星記事の製作者は、戰國時代に在りと思はるれば、隨つて二書も亦戰國の作に出づるなるべしといへり。更に「指南車考」（橋本增吉、東洋學報）は西洋學者の往々にして指南車と磁石と羅針盤とを混同視して研究することの不合理なることを説き、指南車の記載の確實なるものは司馬晋以前には遡り知り得ずして、畢竟

天子南面君臨の象徴として裝飾的意味合のものに過ぎずとの見解を提出す。「支那古代石磬考」（那波利貞、史林）は磬の起原其の文字上の解釋より述べ、尙古來學者の間に疑問の種となれる磬折倨勾の問題をば考工記の記載を三角法を應用して計算し、其の結果を以て誤謬の異說を批判否定して其の角度を確めんとしたり

滿蒙問題は刻下重要の問題なるが、之が爲めに毎月の滿蒙研究彙報に時事問題と經濟事情とを察すべき記事滿載されつゝあるは今更言ふを須ゐず、其の學術的研究の基礎となるべき史料の收輯に滿蒙叢書刊行の業起れり、而して滿州蒙古朝鮮三者の歷史的研究論文は其の朝鮮に關係多きものは別項朝鮮史の條に紹介せるが如きも、尙「契丹の國軍及び戰術」（松井等、滿鮮地理歷史報告第四）の如きは契丹の兵種、徵集、兵力、團隊の組織・任務及び名號、行軍戰鬪と軍隊區分、宿營給養及び輜重の諸問題を研究し「宋對契丹の戰略地理」（同人、同書）は燕雲十六州及び三關、遼・北漢、宋の相互關係位置、西方及東方地區に於ける宋の警戒線・防禦線としての塘濼黃河、契丹の南方出動に關する地理を論じ、「金代北邊考」（津田左右吉、同書）は東北路招討司及び臨潢府方面の邊堡、蒲與路及び上京路方面の守備を調査し、「蒙古の高麗經路」（箭內互、同書）は太祖の救援、太宗の征伐、定宗憲宗の征伐等を論述し、「鮮初の東北境と女眞との關係」（池內宏、同書）は主として慶源府の復置と富居に於ける慶源府とを研究し、之を鏡城慶源間の驛站、慶源府內の地名、慶源府復置の事情、復置の慶源府と富居の慶源府・寧北鎭の設置の諸問題に分類して考覈する所あり。

言語文字に關する問題には「金史に見ゆたる土語の官稱の四五に就きて」（鳥山喜一、史學雜誌）は金史語解、金國語解、滿州源流考、等による比定研究の上に意見を附し、「外國語の漢譯」（中村久四郎、東亞研究）は東洋史研究者に取り一般的に必要なる此の方面の事情を縷述して、譯譯の起原より漢譯の最も缺點と認めらるゝ聲音の學遲れて發達せし爲め外國地名人名等を音譯するに當り一音多字なると、漢字音に古今南北の大差別ある故其の原名を知るに不便多く加之訛譯、省略、謬譯の伴ふありて研究者に與ふる損失の大なるものあるをいへり。

若しそれ文化史的方面に至りては支那巫祝の上代文化に有せる關係を論じて醫術星占に及びたる「續說巫祝補遺」（狩野直喜、藝文）あり。又「晉代文明の一般」（岡崎文夫、歷史と地理）は風俗と政治との關係より論述して晉人の好尙なる家諱を尊嚴にし門地を矜尙し、婚姻を愼重にし、流品を區別することの注意すべき現象なるを指摘し、一轉して姓族主義の文明の藝術の萠芽を齎らせることに及び、再轉して學問の公布と其の變遷とを叙し三轉して

享樂的傾向の兆したる事情を詳述し、「盛唐の長安」（那波利貞同誌）亦專ら開元大曆年間の長安の經濟風俗を觀て、奢侈の流行富豪の跋扈、婦人の墮落公子の行樂を語り、「文化史上に於ける秦漢隋唐の位置」（同人、同誌）を論じて周末に地方的に特色を帶びつゝ發達せし文明の秦に統一せられ、漢に融合せられしことの猶南北朝時代に各々特色を備へて發達せし南北支那文明の隋に統一せられ唐に融合せられたるに比較し得べきを說く、「濟南の廣智院と徐家滙の天文臺」（有高巖、東洋時報）は支那古今文化の性質の相異を察すべき記述なるべし。風俗史方面の研究には「周代風俗考」（服部宇之吉、東亞研究）あり。主として周代宮室の制を說き、「正倉院御物に見ゆる唐朝風俗の一斑」（原田淑人、國華）あり。衣冠に於て幞頭、襦、衫、袴褶、馬具の杏葉、彈弓の事、を叙し、樹下美人圖の美人の唐代土俑に一致せる髻髮の風俗を見得べく、髮多くして地に曳ける婦人の裙は所謂石榴裙にして、之を尺八婦人圖に知り得べければ、李杜の詞藻、元白の小說躍如として眼前に迫ることを論述せり。年中行事の「元宵觀燈」（那波利貞、歷史と地理）の風俗亦蓋し南北朝に既に存したるならんも隋の開皇中に至りて更に擴張せられたるものなるべきをいへり。二十年間に前後七回の遠征をなしたる偉業を總括し、併せて明代に於ける航海術と羅針盤の使用を論じたる「鄭和の南海經略」（有高巖、歷史と地理）亦交通史方面の好文字たるを失はざるべし。遺跡探檢として「おるでんぶるぐの新疆探檢」（瀧精一國華）は西曆一九〇九年以來略喇沙爾、吐魯番、庫車地方に於ける發見の史料をば主として美術史家の見地より紹介せるが美術の方面のものとしては「大同の佛像」（松本文三郎、藝文）ありて彼の靈巖石窟の彫造は僧祇粟の設置とは全然無關係にして開鑿の業は全く帝室内帑に據り、然も北魏人の手にはならずして、却て印度技術家の作なるをば實査と學說とより考證し、「宋畫の特質」（田中豐藏、國華）は亦傾聽に値すべく、「六朝隋唐代の壁畫」（那波利貞、藝文）は其の目的の變遷と墓穴支室に壁畫多かりしことを指摘す、音樂に關するものには「印度樂律と林邑樂の沙陀調との關係に就て」（田邊尙雄、東洋學藝雜誌）ありて、沙陀の名が從來の學者の間にて印度の音階の名なる Sadhani の語より來れるものとせるに反駁を加へ、印度の數種の樂律を考へ、唐以後の所謂沙陀調に比すべき印度音階の Shadji は古樂に比して三律高く、林邑樂の沙陀調は實に壹越調律旋なれば、沙陀は Shadji の語より轉訛音譯せられたるものならんを疑へり。圖書史料の本文研究批判に於ては「水經と水經註」（小川琢治、藝文）あり、周秦漢の間に傳はりし古代の地理書に基きて、三國頃に其の最も主要部分を抽出して有用なる水誌を作成せしものゝ水經にして、

縛道元の註を加へし時は此の原本に郭璞の加へたる註ありしを、一部を刪除して自註を加へたるものなるべきを論じたるあり、「莊子攷」（武内義雄、同誌）も亦漢志所錄の五十二篇は淮南王門下に於て校讎せられ、隨つて淮南子と類似せる部分多く、二書の比較研究より今本の錯雜を證し得べく、今本莊子は郭象の刪定する所にして完具のものに非ざれば、淮南子列子の中より其の佚文を發見し得ることを指摘せり。其の他「元の世祖忽必烈の人物」（箭内亙、東洋時報）「唐以前の圖書」（那波利貞、歷史と地理）亦注意すべし。〔那波〕

〔西洋史〕昨年の西洋史界に於て公刊を觀たる著書は例の如く概ね時局に關係せる現代史の方面に限れるが如し。其中主要なるものを擧ぐれば、「史眼に映ずる世界大戰」（箕作元八）は著者が隨時發表せる現職役關係の史論十餘篇を輯載せるものにして、史的見地より現時の諸問題を解釋し、往時を省察して教訓を與へ、警告を發せるもの、「最近西洋史講話」（齋藤清太郎）はビスマルク公時代より一九一七年末に至る列國の國際的關係、政治社會問題を說述し、現時の狀勢に到る史的發展の徑路を明かにしたるもの、「獨逸膨張史論」（煙山專太郎）は現代獨逸帝國の膨張政策覇制運動を叙し且此問題に對する歐洲識者の代表的意見を紹介するに努めたるものなり。是等の著述を外にして、かの、一昨年より豫告せられたる「世界興亡史論叢書」が若々西洋史界に於ける不朽の名著を邦譯して、我讀書界に紹介せしは特筆すべし。就中西洋史を窺ふものゝ必讀を要する史界の巨人レオポルド、フオンランケの「世界史論講錄」（村川堅固譯）の出でしは最も慶賀すべきことにして、譯者亦其人を得たるは更に吾人の歡喜を深からしむるものといふべし。其他シーレイの「英國膨張史論」（加藤政司郎譯）「ナポレオン三世」の「ケーザル時代羅馬史論」（長瀨鳳輔譯）「バッヨット氏」の「英國憲政論」（吉田世民譯）「ヴインデルバンドの歐洲思想史」（北・井上共譯）の如き孰れも世に著はれし名篇が引續いて譯出公刊せられしは寔に一般讀書子の幸と稱して可ならん。該叢書以外に於て、ギボンの「羅馬盛衰史」（坂本健一譯）が譯本となりて世に出でしも、亦西洋史書邦譯の一勞作として推奬すべきものなりとす。

次に吾人は昨年の諸雜誌に發表せられたる西洋史關係の諸論文中その主要なるものを便宜上、時代別其他の方法により類別して左に紹介せん。

先づ古代史方面に於て「希臘の波斯軍掃蕩戰」（坂口昂、大觀）は該職役に會して危機に臨める希臘の國民的文明が遂に其勝利によりて自己に對する政治上精神上の抗爭要素を除去し隆昌の運に向ひし所以を說き、「アレクザンドル大王の東征」（同人、同誌）

は大王の東征が希臘文明の國民的性質を轉じて世界的性質に趣かしめ、東西文明の融合が試みられ、政治に宗教に後來の世界的文明の要素が育生されし消息を明かにせるもの、「ポエニ戰役の興ふる教訓」（村川堅固、同誌）は該戰役の由來原因を說き、ローマ國民一致の努力奮鬪は能く强敵を挫き、殊に偉傑ハンニバルの雄略も國民團結の終始一貫せる對抗力に打勝ち得ざりし所以を力說せり。中世史に屬するものにありて、「タキツスの觀たる古代獨逸」（占部百太郎、三田學會雜誌）はタキツスのゲルマニヤ志によりて古代獨逸人の一般生活社會及政治組織を述べ、殊に其政治上に於ける民主的性質を注意し、「英國の封建制度」（同人、同誌）は歐州に於ける封建制度の起原來歷、ノルマン征服以來英國に行はれし該制の特質を說き、「ヘンリ四世時代の獨逸特に都市の勃興に就いて」（植村清之助、史林）は同時代に於ける獨逸國家社會の一般狀勢が一轉機を來たし其間市民階級が一の勢力要素として出現するに至れる事情を述べたり。近世史の範圍に於て「佛獨逸を生める七年戰爭」（中村善太郎、大觀）はフレデリツク大王の政策七年役當時の國際關係を說き、該戰の獨逸殊に普國の前途に及ぼせる影響を示し、「フランス革命及ナポレオン戰爭の意義及影響」（筧作元八、同誌）は佛革命の原因經過、ナポレオンの政治殊に對英方策、其事業の歐州に及ぼせる影響を論ぜり

現代史并ひに大戰關係の論文としては、「ビスマルクの研究と大戰」（原勝郎、史林）は先づ獨逸に於てビスマルクに關する研究著述が大戰勃發以來頻繁に公刊されし所以を注意し、該研究の從來流行せる模樣を述べ、彼の政策と現在獨逸との關係を說ける代表的著作たるデルブリツク教授の「ビスマルクの遺產」を批評せるもの。「カイゼルの環境と理想」（坂口昂、中外新論）は過去獨逸の歷史が齎せる主義思想と現時代の緯神世界の現實とを環境とせるカイゼルの個性と理想を論述せるもの。「歐洲の戰爭に就て」（林彌三吉、史學雜誌）はマルヌ戰とタネンベルヒ戰とを中心とせる時期と昨年春期の決戰とに就きて、專間の見地より戰の經過を述べ、相互の戰略を批評し、且其間に於ける政略と戰略と相交錯せる所以に言及せるものなり。

美術史關係のものとして「初期基督教の美術に就いて」（濱田耕作、宗教研究）はカタコムベ、バシリカの建築及彫刻繪畫に現れたる初期基督教美術の技巧其特質を示せるものなり。法制經濟史方面に於て「近世經濟史上に於ける企業家の地位」（阿部秀助、三田學會雜誌）はフツガー家の近世初期に於ける各方面に亘れる企業的活動を說けるもの、「英國穀法史論」（飯島幡司、國民經濟雜誌）は英國穀法の發達と其の撤廢せらるゝに至りし事情を述べこれに關係せる經濟學說を紹介せるもの、「米國憲法の由來及特質

」（美濃部達吉、國家學會雜誌）は該憲法成立の由來及その聯邦主義民主々義、三權分立主義を說明したるものなり。歷史地理學的方面には「希臘紀行」（濱田耕作）は親しく其地に遊んで西歐美術の淵源を探り、歷史の跡のを訪ひたる紀行なり。「君府の思ひ出」（坂口昂、史林）は、天下の王城たる君府の面目を地理歷史の上より描出し、この都府に對する名稱の起原意義を解明したり。〔植村〕

考古學　過ぎし一年に於ける考古學界は前年來の新機運彌々著しくして、所謂彌生式土器の問題は其の民族と住居地及び文化に對する學者の攻究益精緻となり、各種の新資料の發見に依りて從來最も難解の一とせし銅鐸の年代の如きもこれが推定の根據を得んとし又鏡鑑の研究の進むと共に、所謂金石併用時代の狀態を明確にしたるが如きは特筆すべく、其の取扱へる資料にも單に偶然發見に係るもの以外、學者の豫定計畫に基き發掘又は、調査せる所に據らんとする風盛なりしは慶ぶべき傾向なり。例に倣ひて斯界の業蹟を觀察せんに、先づ所謂彌生式土器問題に就いては、前年の調査に係る報告として「大和國高市郡漸澤村遺蹟調査報告」（高橋健自、奈良縣調査報告書）あり、詳細に遺跡の性質と遺物とを紹介して、之を遺せる住民は古史に見ゆる土蜘蛛なるを說く、而して此種遺蹟として最も注意を惹ける河內國府のものに就いては「河內國府石器時代遺蹟發掘報告」（濱田耕作、京都大學考古學研究報告）は京都文科大學が行ひたる同遺蹟の第一回の調査の結果を公にして、出土の大形石器の性質と所謂彌生式、繩紋の兩土器との關係に就いて、そが原始繩紋土器より別れたるなりとの新しき土器の系統論を試み、遺蹟を遺せる人種の原日本人なるべきを主張せるもの、「河內國南河內郡道明寺村大字國府字乾の石器時代遺蹟より發掘せる人骨」（小金井良精、人類學雜誌）は鳥居氏の發掘より得たる四體分の人骨の計測を擧げ其の特徵のアイヌに近きを報告せるものなり。又「肥後轟貝塚河內道明寺等にて發掘せる人骨に就て」（鈴木文太郎、同誌）は京都大學發掘の人骨と共に前年鈴木博士の得たる轟貝塚及び備中津雲の人骨に就いて論じ、前者に對しては日本人に近かるべきを說けり。是等の報告に關して「河內國府石器時代遺蹟發掘報告を讀む」（喜田貞吉、史林）は京都大學報告書の土器系統論に反對して、彌生式と繩紋土器とは製作者を異にせるを主張し、同地出土の遺骨はアイヌ族のものと認むべく、後彌生式使用の民族來り住せるものと解すべしと述べ、更に「河內國府遺蹟最古の住民」（同人、歷史地理）に於ては、昨年に於ける新發掘の結果をも併せて一方遺蹟の層位狀態、併出の玦狀耳飾の研究より論じ、他方現下の解剖學上の研究に疑を挿むの餘地あるを指摘して之を古傳說に考へ最古の住民の

アイヌなるべきの主張を高潮せり。玦様耳飾に關しては別にこれより先に「玦様の石製品に就いて」（柴田常惠、人類學雜誌）なる研究あり。此の國府の遺蹟に就いては昨年四、五月に亘り第四回の發掘本山彦一氏に依り行はれ、十九體の人骨と共に幾多の新事實を提供せること「河内國府第四回發掘調査報告」（岩井雍南大阪毎日）に載せたり。

各地に於ける彌生式關係遺蹟の報告としては「河内國南高安及び喜志石器時代遺蹟調査（梅原、島田、京都大學考古學研究報告）「大和磯城郡唐古の石器時代遺蹟に就いて」（梅原末治、人類學雜誌）「松山市及び附近出土の彌生式土器」（長山源雄、同誌）を初め、美濃國太田町乞食巾、大塚の遺蹟を紹介せる「美濃太田郡に於ける石器時代遺蹟遺物」（林魁一、考古學雜誌）鎌形の珍らしき石器を記して類品を擧げ、その彌生式系統のものなるべきを說ける「越中國東礪波郡平村田向發見の石器」（柴田常惠、人類學雜誌）等あり。九州に於ては南部に薩摩排宿の「アイヌ式彌生式土器及び石器等を包含する遺蹟」（山崎五十麿、考古學雜誌）と「薩摩國排宿郡頴娃村仙田の石器時代遺蹟に就いて」（同人、人類學雜誌）の興味ある二編を見、北部にありては前年來引續き中山博士に依りて熱心に考究されつゝありて多くの發表を見たり「九州に於ける彌生式土器と貝塚土器」「肥後國宇土郡花園村岩古層字曾畑貝塚の土器」「貝塚土器と彌生式土器との古さに就て」「貝塚土器の席紋と其類似紋」（以上考古學雜誌）の諸編に於て九州北部にアイヌ式遺蹟なく、筑後の南端に入りてこれを認め、薩摩に至る間彌生式アイヌ式の混在せるはアイヌ族の南方より來れるを示し、所謂彌生式民族は大陸より入りて、九州に於ては筑後、肥後にて接觸せるものなるべく、又兩者の年代に大差なきは肥後阿高の遺物にて知るべしと詳論せり。「銅鉾銅劍並に石劍發見地の遺物」「同上追加」（同人、同誌）の二編は彌生式土器と關聯せる鏡其他の遺物の調査を報告して鏡の年代より所謂金石併用期の年代を明確にせんと試みたるもの、この事は猶後段に說く所あらむ。

さて是等の研究報告と共に昨年度に於て注目を惹けるは各地に於ける石器時代遺蹟の學術的發掘なり。前記河内國府の遺蹟の外備中津雲貝塚、越中氷見洞窟、陸前宮戸島貝塚のそれの如きあり津雲の貝塚の人骨については既に松本（彦）博士の報告あり、別項鈴木博士の論文又前年京都大學の内田文學士が發掘せる人骨調査の結果を發表せるものとて、學界の注意に上りたるが、「吉備路の昔」（岩井雍南、大阪毎日）に載する如く、昨年三月大阪醫科大學の大串博士の一行之を發掘して、人骨と遺蹟の層位狀態につき成蹟を擧げたるあり、同じく七月本山大串兩氏は再び大規模な

る發掘を行ひて、數體の人骨を採掘して、其の一軀の腕より貝輪を伴へる事實を認め、層位に從つて土器の性質を異にするを明にせりと云へり。氷見の洞窟は六月偶然の機會より學者の興味を惹ける遺蹟にして、「越中國氷見郡宇波村大境の白山社洞窟」（柴田常惠、人類學雜誌）は遺蹟の狀態と發見の顱末人骨遺物を紹介し、其の彌生式系統のものなるべきこと、恐らく當時の住居址なるを推測せるもの、「越中大境洞窟内發見の人骨」（松村瞭、同誌）は其の人骨の豫報にて遺蹟の性質の彌生式系統なるに拘らず頭蓋は河内國府と異なり、中頭及び長頭なるを指摘して、現代に於ける各地の頭形と比較して當代の人種的色彩の著しかりしを說けり。「越中氷見郡大境洞窟内の彌生式遺蹟」（上田三平、歷史地理）亦同じ概報にて、之に添へたる喜田博士の文には此の遺蹟の人類定住地ならざるを主張せり。而して此の洞窟は九月末より十月に亘りて、東京大學の小金井、山崎兩博士、石田收藏、柴田常惠、松村瞭の諸氏、東北大學の長谷部博士等に依りて學術的發掘行はれ、各方面よりの考察を遂げたるは昨年度に於ける學界の著しき事項の一たるを失はず、「問題の秘庫」（長谷部言人、北陸タイムス）は此の新發掘に就いての氏の意見を平易に紹介せるもの、其中遺蹟の層位狀態の明瞭に第一層より第六層に至り、最下の層より繩紋土器の出土せる新事實を報道せり。

十月後半に於いては陸前宮戸島貝塚の發掘あり。東北大學の松本彦）長谷部兩博士等之を主催して十數體の人骨と、畿内の遺蹟と聯絡を保てる土器の伴出するあり、「宮戸島發掘に就いて」（松本彦七郎、河北新報）は其の人骨に關する豫報にして、氷見の窟のそれと共に本年の學界を賑すならむ。是等各地の石器時代遺蹟よりかく多數の人骨を發見する事より當代墳墓の形式に關する知識明晰となり來れるが、東北に於て同じく當代の異なる形式の墓制の紹介を見たり。即ち「陸奥國發見の石器時代の墳墓に就いて」（笠井新也、考古學雜誌）は南津輕郡北中野村天狗岱にある墓に納め土中に埋葬して石椎を以て覆へる一種の墳墓の調査を洋遞して、河内國府遺蹟の彌生式墳墓たるに對しアイヌ式石器時代墓の特色にて洗骨式なるべしと說き、「奥羽地方の遺蹟」（木山彦一、大阪毎日）は氏が親しく發掘せる陸前細浦の同形式の遺蹟の狀態を紹介せり。而して「石器時代の墳墓に就いて」（喜田貞吉、考古學雜誌）は前者の發表を機として河内國府遺蹟のアイヌ式墳墓なるを說き、薩摩に於て近く發見せる石器伴出の古墳を報じて彌生式石器時代墳墓に關する意見を附記せり。

さて彌生式土器を遺せる人種の問題、即ち我が日本人種の成生に就いては、既に前年度に鳥居龍藏氏は固有日本人北方派說を主張し、喜田博士は隼人海部說、南方渡來說を採れるが、昨年度

に於て兩氏共益自說を主張し、加ふるに上述の如く濱田、高橋、中山諸氏の學說出で柴田常恵氏の「考古學」外アイヌの石器時代につき新に原始日本民族の石器時代の遺蹟に關する諸說を綜合記述して前說に贊せるあり、頗る活氣を呈せり。されど兩說共石器時代住民は日本のものとアイヌの二派あることを認むるに於て一致し、解決の曙光輝きつゝあるを見る。たゞし此の際に當り前年末に現れたる「蝦夷はアイヌなりや」（長谷部言人、人類學雜誌）は現在本邦各地方人の身長の調査より從來我が石器時代住民の遺物として信ぜられつゝあるアイヌの果して史上の蝦夷なるかに疑を挿み、鈴木博士また前揭の論文に於てアイヌの先住民たるを、否定せんとして、我が石器時代住民の寧ろ所謂日本人なるべきを提言せるあり。「日本石器時代人類に就て」（松本彦七郎、同誌）は人類學考古學土俗學上の調査の結果より、同時代人骨の日本人と系統を等しくせるなりとの說に反對して何れもアイヌに近く、この部類に入るべきものなりと說けり。是等の說に就いては喜田博士が最も鮮明にこれを否定し、我が石器人類の二派なるを說けるは一般考古學者、歷史家の一致する所にして、松村瞭氏も現今の日本人の體質の調査より其の民族の混成なるを說けるは注目に値す。

次に以上土器の問題と關聯して調査並に考察の題目となりしは銅鐸、銅劍、銅鉾等特殊の遺物なり。是等の研究また既に端を前年に發したるも、昨年に於ては其の使用年代の考究、化學的調査より延いて我が金石併用時代の問題を究明せんとし一方鏡鑑の研究と待つて長足の進歩を見たり。其の銅鐸に就いては昨年五月五日大和國吐田郷に於て一個の鐸の銅鏡と伴出せる新事實はこれが研究を進めて雜誌、歷史地理の如きは銅鐸號を出せり。「銅鐸考」（喜田貞吉、歷史地理）に博士從來の見解を纏めたるものにて、古傳說より我が上古に古秦人なる民族の分布せるを推測し、銅鐸は其遺物なるべきことを云ひ、鐸は一種の寶器にして之が埋沒は匿藏に外ならず、而して製作年代は伴出の鏡の支那最古の式なるべきより推して支那の先秦なりと論じ、「銅鐸に就いて」（濱田耕作、同誌）は之に關する西人の所說を紹介して簡單に此の種考古學上の遺物の如何に研究すべきものなるかを指示し、銅鐸の樣式發達に關する新意見を發表せるもの、「大和吐田縣發見の銅鐸と銅鏡とに就いて」（梅原末治、同誌）は伴出の古鏡を九州北部に於ける銅鉾銅劍と伴出する鏡鑑と對比して製作年代を西紀前一世紀の頃なるべきを云ひ、之より鐸の使用年代の推定を試みたり。「銅鐸に就て」（鳥居龍藏、有史以前の日本）は銅鐸文樣に現はれたる風俗の南方系なるを主張して、銅鼓との比較上印度支那族と關係あるものなりと說き、「古傳說に見ゆたる但馬民族」（沼

田賴輔、人類學雜誌）は我が國には支那南方より渡來せる天日槍を祖神とする但馬民族古く住して銅鐸は其の遺物なりと論じ、「喜田博士の銅鐸考を讀む」（坪井九馬三、考古學雜誌）は銅鐸考の說に反對して、鐸と支那の周鐘との形式の異なること、其の文樣は一見漢種族と關係あるが如きも、而も自發的なるが如しと說き他方銅鼓との關係を否定して、比較土俗學上より鐸埋沒の隱匿說の信ずべからざるを指摘せり。右の論著とは別に一昨年より着手せる鐸の化學的分析の結果が「銅鐸片の分析」（越前坂井郡井向のもの）「一二の銅鐸及銅鉾の成分に就て」（和泉のもの）（濱田耕作、考古學雜誌）等に發表されて、成分の銅鼓と類似せることの明となれるは喜ぶべし。猶是等の外昨年には出土遺物の調査報告として「淡路松帆村發見の銅鐸に就て」（辰馬悅藏）と「丹後與謝郡發見の二銅鐸」（西田、梅原）の二編、目錄の類には「銅鐸出土地名一覽表」及び「銅鐸關係論文及報告目錄」（以上歷史地理）の二者を見たり。銅鏡銅鉾にありては主として其の伴出の古鏡の年代研究に傾注せるやの感あり。

支那古鏡の研究は前年に引續きて行はれ「王莽時代の鏡鑑と後漢の年號銘ある古鏡に就て」（富岡謙藏、考古學雜誌）は年代の確實なる遺品を擧げて當代の形式を示せるもの、「支那古銅器の化學的研究」（近重眞澄、史林）は遺物の化學的分析の結果を基礎として、主として鏡の新古を論じたる新研究なり。而して鉾劍に關しては「九州北部に於ける銅劍銅鉾及び彌生式土器と伴出する古鏡の年代に就いて」（富岡謙藏、考古學雜誌）は先づ出土の鏡を分類して、漢代の瓦當磚文に對比し、何れも前漢代のものなりと推定し、前漢代の鏡の形式及び我が金石併用時代の date を明瞭ならしめたり。前揭中山博士の二論文及び「九州北部の彌生式土器遺蹟と支那古鏡鑑」（筑紫史壇）また石器土器の鉾劍伴出の事項に注意しつゝ、其の鏡につき上述王莽鏡を基礎として樣式上より同じく前漢のものなりと推せり。而して「古式支那鏡鑑沿革」（中山平次郎、考古學雜誌）は更に是れを詳說して一層我が金石併用期の年代を確めんことを所期せざる如し。此の時期の性質に就いては早く年初に「考古學上利器の材料と時代區分」（濱田耕作、歷史と地理）の一編あり、明確なる標準を與ふ。

以上は昨年に學者の最も興味を感ける特殊の題目を稍詳細に見來れるものなるが、進んで一般に亘る斯界の成蹟を瞥見せんか。一般考古學及び研究の方法等に就いては前年より引續ける國史講習錄の「考古學」（柴田常惠）の完結せる外に、濱田博士は昨八月開催の京都大學夏期講演に於いて考古學の研究法を講じ、又別に「考古學の栞」（史林）を草して學術的調査研究の方法を指示しつゝあるは特記すべく、先住民に關する概論としては「先住民

族論」（大野雲外、人性）と「日本民族概論」（喜田貞吉、國史講習錄）の二者あり。後者は氏の新研究を平易に綜合せるものなり。其他遺蹟の調査としては武藏野の調査と北海道に於ける諸種の研究なり。前者に就いては武藏野會より新に機關雜誌を出して「有史以前の武藏野」「有史以前及び原史時代の東京」「大陸研究より見たる武藏野」等此の方面に關するものが鳥居龍藏氏に依り試みられつゝあり、後者は綜括的記述より成る「北海道貝塚に關する私見」「北海道のチャシ」（以上阿部正巳、人類學雜誌）を先づ數ふべく、而して學者の注意が同地に存する環狀石籬に向ひて「石狩國の環狀石籬に就て」（同人、同誌）「北海道に於ける環狀石籬」（鳥居龍藏、我が國）「日本のストーン、サークル」（河野常吉、歷史地理）「北海道小樽附近古代住民の遺蹟に就て」（寺田貞次、考古學雜誌）の諸編となり。

此の外遺蹟の報告としては「九頭龍川上流の石器時代遺蹟」（上田三平、人類學雜誌）「再び越前北堀の貝塚に就て」（同人、考古學雜誌）の二編あり、遺物にては「骨器の形式分類」（大野雲外、人類學雜誌）を數へ得るのみ。其の武藏村山村に於いて當代の遺物と認むべき大獨木舟を發掘せるは注意に値すべし。

原史考古學の方面は稍寂寞の感あるも、また各地古墳の正確なる調査報告の發表を見たり。「奥羽地方に於ける原史時代遺蹟の概觀」（笠井新也、考古學雜誌）は古墳を主として我が大和民族遺蹟の同地に於ける分布及び形式の變化を說けるもの、「丹波國何鹿郡多田の方形古墳」「丹波國南桑田郡篠村の古墳」（以上梅原末治、同誌）の二編は本邦方形墳の綜括を試み、其の起源を論じたり。「下野壬生町附近の車塚に就いて」（森本樵作）「讃岐國に於ける石棺ある二三の石棺に就て」（長町彰）「出雲に於ける特殊古墳」（梅原末治、以上同誌）「大和丹波市町北部の古墳に就て」（同人、人類學雜誌）等は何れも特殊の遺蹟の詳細なる記述として擧ぐべく、學術的發掘の報告としては「西都原古墳調査報告」二編、（内藤虎次郎、今西龍及び原田淑人、柴田常惠、宮崎縣報告書）あり。遺物の研究には文獻上言語學上より自己の見解を發表せる「朝鮮式陶器に就いて」（喜田貞吉、歷史地理）特に其の系統を辿れる所注目を惹く。此の外小編ながら「筑後國知德古墳石槨文樣の赤色顏料の成分」（小松利三郎、考古學雜誌）は興味ある報告なり。古墳以外の我が上代遺蹟として、「信貴山城址の研究」（關野貞、奈良縣史蹟調査報告）あり上代の寺院館址の調査には「相摸國分寺考は國府及び驛路考」（沼田頼輔、歷史地理）「武藏國分寺遺蹟考」（同人、武藏野）「大和毛原寺遺址」（西崎辰之助）「東大寺東西兩塔考」（天沼俊一、以上奈良縣報告書）「出雲の國分寺と四王寺の址」（梅原末治、歷史地理）及

び「都府樓址の研究」（池上年、考古學雜誌）等あり。就中「東大寺東西兩塔考」は主として其の建築を復原せるものにして、「都府樓址の研究」は精密なる實測圖を掲げて此の遺址の考古學的研究を大成せるもの、永く學界の基本となるべき調査なり。窯址については「山城國山科村に於ける古代窯址」（島田貞彦、同誌）「越前の古代製陶遺蹟」（上田三平、同誌）の二小編を見たるのみ。

眼を轉じて朝鮮方面を觀察するに、總督府の古蹟調査事業は引續き行はれて、昨年に於ては黑板博士は滿洲輯安縣にある好太王碑に關する特殊の調査を行ひ、原田淑人氏は新羅の國都慶州に於て善門里の積石塚を發掘して珍奇なる勾玉と純金製耳飾等を得たるあり。濱田博士は星州、高靈、昌寧等古の伽倻の地方の古墳を發掘して、各地より古の日本との關係を見るべき遺物を蒐集し、谷井濟一氏は十月以來南朝鮮を旅して、新羅時代の遺蹟を鳥居龍藏氏は同じく十二月より石器時代の遺物の探求をなせり。古蹟圖譜の第五、第六を公刊せると「人種考古學上より觀たる鬱陵島」（鳥居龍藏、東亞之光）の發表また記臆すべき事項なり。

支那方面にては關野博士は一月以來支那內地の探檢に從事せらるゝありて成績の頗る顯著なること既に「北支那古代文化の跡」（美術學校月報）の一小編にても窺はる。印度西域方面にては國華社の印度探檢の成功を祝し此行、澤村氏によりて幾多の佛蹟の紹介せられたるを喜ぶと共に、西域に就いては「大英國博物館スタイン氏發掘品過眼錄」（濱田耕作、東洋學報）の考古學に關係せる見聞錄一編ありしを記さん。西洋方面は大戰亂と共に本邦學者の之を訪ふ少く、從つて彼地遺蹟の紹介せられたるなきを惜むも、前年の紀行として「希臘紀行」（濱田青陵、單行）と「伊太利紀行」（同人、歷史と地理）の二者を擧ぐべし。

尙ほ土俗學方面に於ては「剝船考」（西村眞次、單行）は土俗の比較調査を基として立論したると「隱里の話」（柳田國男、大阪每日）の二編を擧ぐべく、新に此の方面の機關として「土俗と傳說」及び「傳說」の二雜誌の發刊を見たり。金石文の分野には新たに河內野中寺より出たる金銅佛に就いて「野中寺の金銅彌勒菩薩」（木崎好尙、考古學雜誌）「野中寺金銅彌勒像に就きて」（富岡謙藏、京都美術畫報）及び「河內野中寺金銅佛造像記の中宮天皇に就て」（喜田貞吉、考古學雜誌）等の諸編現れ、「棟札の沿革」（沼田頼輔、以上考古學雜誌）あり、「紀奈良縣金石年表」（天沼俊一、奈良縣報告書）「下野國金石銘文年表」（丸山太一郎、考古學雜誌）「山城金石年表」（梅原末治、單行）の表類また昨年の產物なり。支那方面に關する「唐代女子騎馬土偶に就いて」（原田淑人、考古學雜誌）の一文は遺物と文獻の比較研究に成るものなり、美術史の方面にて考古學に特に深き關係ある

ものは「法隆寺堂塔造建年代私考」（小野玄妙、佛書研究）の前年より引續けると支那方面に於ける「大同の佛像」（松本文三郎藝文）等を主なるものとなす。〔梅原〕

◎地理學界

緒説 先づ地理學上重要なる事件及變動を擧げんに、雲夜の長短に關て時計を遲速せしむる所謂「日光利用法は」能率增進の一方法として戰時歐米各國に採用せられしが、未だ我國に及ばず九月十九日文部省告示を以て東京麻布天文臺子午儀の經度を、從來よりも十秒九だけ東に移して、緯度東經一三九度四四分四〇・九秒と改定せられたり、由て地圖上日本全土は約十一秒東へ移り、東京邊にては其差二百五十米即二萬分一圖にて約四分東に移ることゝなれり。十一月初旬長野縣大町附近に恐るべき地震起れり、此地方は駿河灣より姫川谷に達する本州横斷大斜裂線の一部に當るを以て、此線に沿うて震動を起せるものか、昨年の本欄に一瞥したる英國のシャックルトン氏の一行は、南極洲横斷の目的を以てエンデュランスに乘船、一九一四年末出發せしが、ウエッデル海にて浮氷の爲に進退の自由を失ひ、纔に那威の捕鯨船に救はれ一九一六年晩春フォークランド島に歸着し、其年末更にロッス海に殘存せる隊員救助の目的を以て新西蘭を發し、マックマードサウンドにて七名の生存者を收容したり。此探檢により南極洲の海岸二百哩を發見し、ウエッデル海の狀態を明にするを得たり。又北極洋探檢の目的にて出發せしカルラク丸の一行は西比利亞東北海上にて船體難破の爲め隊員の一部は悲慘なる最期を遂げ、丁抹のラスミュッセン氏の率ゐる一隊は再度北部グリーンランドを横斷し、同島北岸の地圖を完成してフェーロー島に引き揚げ、ヘール、レービッグ兩氏の指揮する那威の探檢隊は、一昨年西部スピッツベルゲンの測量に成功せり。南極到達の先達アムンゼンは探檢船マウラに七年間の準備を費へて、北極探檢の目的にて昨夏出發の筈なりしといへど未だ詳報に接せず。蘭て政治經濟の方面を見るに、四年間の大戰亂は獨逸の屈服を以て終熄し、墺洪國の瓦解、獨逸の萊因左岸撤退等其影響の甚大なる遽に逆睹すべからず久しく問題たりし本邦の原料自給策も漸く具體的となり、南滿洲鐵道會社の蒙古羊毛改良、北海道瀧川の綿羊試育場設置、由東省金嶺鎭鐵鑛の官營採掘等の起れる、亦經濟地理上の重要事項とす佛國の碩學ヴイダル、ドウ、ラ、ブラーシュの物故せるは特に惜むべし。氏は仏校高等師範巴里大學の教授となり雜誌 Annales de Géographie を主宰し、人文地理に於て特に盛名を馳せたりし人なり、享年七十三、「現在の佛蘭西」は其最後の著にて、同誌に出せる「人類の大集團」は未だ完結に至らざりき。出版界を見るに、軍事地理學及びアルサースロレーヌ、巴爾幹及近東、獨領

阿弗利加等に關する著述論文の多きは時局の影響の著しきを示し、純學術的研究は稍寂寞の感なきにあらず。以下地理學に關する著述及び論文に就いて記せん、（煩雜を避けん爲歐米人の著述題名は凡てこれを和譯し、其雜誌には便宜G.L.(The Geographical Journal, London.) S.G. (The Scottish Geographical Magazine, Edinburgh) N.G.(The National Geographic Magazine, Washington) G.R. (The Geographical Review) A.G. (Annales de Géographie) G. (La Géographie) の略號を使用す。

通論に於て「地理學概論」（ウーレ）は地文人文全般に亘れる簡潔の書なり。

天文學教理地理學及地圖學に於て、「地球以外に生物ありや」（新城新藏、歴史と地理）は地球以外には生物繁殖に可能なる條件を具備する天體なしとなし、「重力と地學」（松山基範、同誌）は地球の形狀を說明せり。「航空圖」（ウッドハウス、G.R.）は航空圖に（一）三哩か四哩を一吋に現はしたる地形圖、（二）着陸點繫留場寺院高塔等を圖に記入したる特殊圖、（三）航路附近の地帶圖、（四）寫眞圖の四つの形式ありとし「ジオンアデーア」（イングリス、S.G.）は第十七世紀に蘇國の地圖を作りし同人を傳し、「蘇國初期の地圖と其著者」（同人、同誌）は、蘇國の地圖は、第十六世紀にオルテリウス出でゝより完全のものとなれりとし、以後十九世紀初期までの地圖及び作者を擧げて之を評せり。「マテオリッチの漢文世界圖」（バッドレー、G.L.）は倫敦地學協會所藏の同圖につき、同人の支那に於ける動靜、其圖の由來を明にし、「リッチの地圖の系統」（ヒーウッド、G.L.）は、リッチの圖はフレミッシュ學派の影響を受けたりとし、其證として、楕圓形の輪廓を用ゐたること、南方大陸を記入したること、ニューギニア島を島としたることを擧げ、南米を正しく描きたるはオルテリウスの影響によると斷じ、「世界地圖の進歩」（グレゴリー、S.G.）はフエニキア以來の地圖の發達を叙せり。地質學應用地質學地質構造論に於て、「氷河時代の原因に就て」（山崎直方、東洋藝藝雜誌）は氷河時代の原因說として、陸地隆起說、チャンバーリンの大氣說等を擧げ、結局クロルの春分點移動說を穩當とせるもの、「前世界史」（横山又次郎）「鑛床地質學」（加藤武夫）は古生物學、應用地質學の大著たり。歐文にては地史學のみを記述せし「歴史的地質學」（ミラー）「岩石學原論」（ワインシェンク及びヨハンゼン）「第四紀氷河時代」（ライト）等の新刊あり。「土壤物理學」（モシーア及ガスタフソン）「土壤分子學」（エーレンベルグ）は共に土壤學に關する最新の著述なり。「弓狀山脈及弓狀列島の形式」（德田貞一、地質學雜誌）は褶曲山脈が内陸より洋心に向へることを理由として、從來の地殼收縮によ

る褶曲山脈の成因説を疑ひしもの、「雁行山脈雁行火山脈及雁行列島」（同人、同誌）は山脈火山脈が並行せることを指摘し「Diastrophism より見たる常磐炭田」（青木雁二郎、地質學雜誌）は同炭田の第三紀層中に在る海波浸蝕の痕跡により同層の時代を別たんとせるもの、「廣島、岡山兩縣の地形と第三紀層の分布に就て」（小倉勉、地學雜誌）は中國分水嶺の南にある臺地が岩石の種類によりて各種の地形を呈せることを指摘し、「越後蒲原地方の接觸鑛床」（渡邊久吉、同誌）は同地方の古生層と之を貫きて迸出せる花崗岩との接觸部に生ぜる鑛山を記述せるもの、「世界の瀨戸内海」（德田貞一、地質學雜誌）は同海を二大山系間の窪地として類例を他に求め、「火山地帶及其前列地帶」（同人、同誌）は火山は凡て前列地帶ありとし其幅を百乃至百五十粁とし、「オコツク海岸より」（同人、同誌）は火山帶は小火山脈の平行群より成れることを論ぜり。其他朝鮮總督府の鑛床調査は漸く其歩を進め、昨年中京畿道平安南道等の報告書を出版し二十萬分一の地質圖を添へたり。南滿洲鐵道會社の地質研究所も南滿洲地質概察説明書（百萬分一地質圖添）を出版せり。かくて植民地方面の地質地貌の明となれるは喜ぶべし。火山學及地震學に於ては「火山學」第一卷（ウオルフ）「火山研究」（アンダーソン）の二大著あり「日本噴火志」（大森房吉、震災豫防調査會報）亦有史以來本邦火山の活動を記述せる大著なり。「藏王山の活動に就きて」（大森房吉、東洋學藝雜誌）は同山の御釜爆裂火口に時々起る活動の狀態を述べ、「火山の形狀」（辻村太郎、歴史と地理）はシュナイダー氏の火山現象論によりて火山を分類し、北海道の火山圓頂丘（田中館秀三、地質學雜誌）は北海道主要火山カルデラ内に生ぜる圓頂丘の形狀成因を述べ、「有珠圓頂丘」（同人、同誌）は同火山の圓頂丘を以て火口底より押し上げられしものと斷じ、「霧島山の噴火力に就て」（大森房吉、地學雜誌）は同山將來の活動は熔岩を千三百米以下に押し上ぐる力に止まるべしとせり。伊太利の火山（田中館秀三、地學雜誌）は同國のベスビアス、エトナストロンボリ、ブルカノ等の火山活動の形式を分類説明し、「陸奥の恐山」（佐藤傳藏、同誌）は同山をホマーテ式の火山とせるもの、奥羽西部の地震帶に就きて（今村明恒、震災豫防調査會報）は両羽地震帶に於ける有史以來の震災を述べ、「地震波動に關する將來の研究（ノット、S.G.）は震波の研究方法を論ぜるものなり。地形學に於て、「山の成因と其種類」（田中秀作、歴史と地理）は各種の山を成因により分類説明し、谷の形に就て（同人、同誌）は之と對せるもの、珊瑚礁の論（辻村太郎、同誌）はダーウイン、デーナ、デービスの論を紹介し、準平原（同人、同誌）は其地形を説明し、海岸の地形（同人、同誌）は海岸を沉降と隆

起さに分ちて其形狀を述べ、氷雪による山嶽の彫刻（同人、同誌）は氷蝕地形を說明せり。「河蝕の或形式に就て」（德田貞一、地質學雜誌）は河の浸蝕作用が風の方向等により特殊の形を取ることを指摘し、「甲斐の昇仙峽」（脇水鐵五郎、地學雜誌）は甲州荒川御嶽の絕景を花崗岩が節理に沿ひて浸蝕を受けたるものとし大臺原山（同人、同誌）は上市より大臺原までの地形地質を叙せり。「海岸浸蝕の營力としての穿岩生物」（ジェフリー、G.L.）は海綿、鹽蟲、軟體動物等の浸蝕作用を說明し、「砂丘帶の研究」（キングG.L.）はリビヤ沙漠にある長大なる砂丘帶は幾多の新月形の砂丘群より成れるものとし、此砂丘の出來方を說明せり。「砂湖及三角洲の成生に於けるコロイドの作用」（バートン、　）は溶解せずして水中に含まるゝ固形體卽コロイドの作用を說き、「安南北部に於ける海岸の隆起（シャッシニュー、ジオグラフイー）は同地海岸隆起の痕跡を指摘し、「西濠洲淮乾燥地の浸蝕作用と夫に由る地形並に乾湖の成因及發達」（ジャッドソンG.L.）は同地方の地質地貌を說明せり。水系學に於ては、「諏訪湖の研究」（田中阿歌麿）「河川學」（グラベリウス）の二大著の外、「河流の研究」（遠藤金英、歷史と地理）は紀ノ川を研究し、（北海道の火山湖」（田中館秀三、地學雜誌）は屈斜路其他諸湖の湖學的研究なり。海洋學に於て「海の深さ」（川村多實二、歷史と地理）は從來の深海錘測の歷史を叙し、「東京灣の津浪に就きて」（大森房吉、東洋學藝雜誌）は一昨年十月一日の津浪を說明したり。氣象學に於て、「晝氣樓的現象に就て」（藤原咲平、地學雜誌）は其現象を（一）ミラーヂ的現象（二）ヴインス氏の現象（三）晝氣樓に分ちて各現象を說明せるもの、有史時代の氣候變化（石橋五郎、歷史と地理）は氣候變化に關する各種の說を掲げ、「印度の氣候」（下田禮佐、同誌）は印度の氣象氣候を說明し、氣候の周期的變化（遠藤金英、同誌）は之に關する各種の說を擧げたり。「氣壓の變化に由て起る平均海面の變化」（クローズ、G.L.）は從來の本問題に對する研究と氏の研究の結果とを對比し、太陽面の變動と地球上の天氣（ハンチングトン、Monthly Weather Review）は太陽黑點と天氣との關係を數量的に考定せるものなり、其他「瓜哇の雨量」（ウオーリス、S.G.）は同島の雨量配布を說明し、「巴剌西爾の氣象と氣候」（デガルバルホ、S.G.）は同國の氣象を叙せり。動植物に關するものは甚乏しく、植物分布（ドルーデ）の著ある外、「動物分布と地理歷史」（川村多實二、歷史と地理）あり。人文地理學一般として、「西歐の人文地理」（フリューア）は西歐殊に佛國を中心として、羅馬的大西洋地中海岸の人と環境との關係を論ずるもの、「帝國の地名」（ルーカス）は大英帝國の地名の起源を論ぜり。人口集落に關す

る研究に於て大正四年に施行したる臺灣のセンサスの報告は「第二次臺灣臨時戸口調査記述報文」として同總督府より發行せられ「地形輪廻と聚落の分布」（リッチ、G.R.）は輪廻の各階程に於て聚落分布に異動あることを數量的に論じたるもの、「人類の大聚合に就て」（ラプラーシュ、アンナル）は人類密集地の地理的條件を指摘し、「エデール、ペンニン谿谷の研究」（フォーセット、S.G.）は題名の谷を例として、地勢と人口分布特に聚落の研究をなし、アルヂリアの田舍住居の形式（オーギュスタンベルナール、エドモンヅツテ、A）は、同國を天幕住居地と茅屋住居地とに分ち、其面積人口を數量的に比較せり。人種學方面に於て、「蘇國の人種」（ケース、Nature）は古代蘇國民族の起源を論じ「通古斯族の痕跡」（ツアプリツク、S.G.）は同族を分類して其生活を叙し、「雜種族」（ヂンヂエルステット、S.G.）は同族を分類して人類學上より之を評論したるものなり。政治地理に於て政治的境界及び國境劃定（ホルヂツチ）の外、「巴爾幹に於ける民族主義の勃興」（ワツトソン、S.G.）は巴爾比亞を主として之と異國との關係を說き、「國際改造の地理的方面」（マツキンダー、同誌）は大戰後の歐洲國境改定に際し、ア、ロ二州、波蘭、巴爾幹、ダニューブ地方民族の地位を論じ、「大陸國及島國」（山上萬次郎、地學雜誌）は、食料品原料品の關係上島國獨立の困難を說き、「太平洋の處分」（マツグレゴール、S.G.）は太平洋の分割を叙して、其處分を日英米佛の決定に俟つべきものとせり。植民地に關して「植民地の種類と其統治法」（下田禮佐、歷史地理）は植民地を經濟上政治上より分類說明せり。軍事地理學方面にて、「戰爭に關する地理學」（マツキー、S.G.）は軍事上より地圖の讀方地下水風速雨量等を測定するの必要を說き、「聯合軍の制空權に對する米國の貢獻」（トウラスン、N.G.）は米國空中軍の活動を論じ、「自然の戰場」（ラゴルス、同誌）は米國大西洋岸の軍事地理を述べたり。「獨領岡弗利加植民地に對する作戰」（田中館秀三、地學雜誌）は聯合軍の同植民地征服の次第を記し、「世界戰爭の戰爭地理學に與へたる教訓」（小川琢治、史林）は、戰爭地理學の研究事項が地質天氣人口經濟問題に及びたることを說明せり。

經濟地理方面にて、「眞の小麥問題」（クルツクス、G.L.）は英帝國小麥問題解決の方法として加奈陀の小麥生產力增加の必要を說き、「牧羊業の地理的方面」（ワルトン、S.G.）は牧羊の地理的條件を擧げ、「協商國の食料問題解決」（グレーヴス、N.G.）は協商國の食料に對する米國の任務を述べ、「歐洲戰場に於ける鑛產地領有の戰場に及ぼせる影響」（井上禮之助、地學雜誌）は鐵石炭石油の分布を論じて敵味方の如何に其領有に苦心せるかを

考へ、「植民地と砂糖業」（下田禮佐、歴史と地理）は砂糖業の植民地經營に及ぼせる影響を論せり。鄕土研究は稍下火となり、「帝都の近郊」（小田内通敏）が東京郊外の變遷を論ぜるのみ、研究法教授法に於て、「地理研究法手引」（ダーバン）は國別研究を排して自然的境界に從て地理的單位を定むべきことを推奬し、「地理の教授」（マッキー）は特に地圖の讀方の教授に注意せり。地誌旅行記中支那方面にては「支那省別全誌」（東亞同文會）は已に（一）廣東（二）廣西（三）雲南（四）山東（五）四川（六）甘肅（七）陝西（八）河南の各省誌を出せり、何れも省の總論は簡にし、各府縣の事情を詳述せり。「撫河及閩江流域」（山根新次、地質學雜誌）は江西福建境界地方の地形地質を叙し、「甘肅省西藏境界旅行」（ファーレル、G.L.）は西寧附近の礦器採檢記なり。「西藏喇嘛談」（黃木文敎、地學雜誌）は其宗教々風俗を述べ、「西藏の現在」（下田禮佐、歴史と地理）は一般人文地理を說明せり。南亞細亞にて、「暹羅横斷記」（ホセウス）は著者が二年間の暹羅旅行記にて、鮮明なる挿圖を加へ、「佛領印度支那の米」（カピュー、アンナル）は其米の產出力及改良を說けり。巴爾幹近東方面に於て、「旅行回想錄」（エート、S.G.）は半世紀前波斯經由印度歐洲電線架設の際の經驗談、「パレスタイン」（マスターマン、G.L.）は、同地は石灰岩より成る不毛地なれども人工的灌漑を施せば農に適し植民の可能なるを說き、バグダッド鐵道と其支線（ウツツ、同誌）は詳に同鐵道の沿革現狀を說きて、シリヤヘヂャス鐵道に及べり、「亞細亞の門」（ウオーアフイールド）はメソポタミアクルヂスタン旅行記、ヒンヂヤ堰堤（マヂー、G.L.）は古の巴比倫河近の灌漑事業を述べ、「アルバニアの將來」（バーンス問題）は將來の同國の國境線を描き、農牧業の有望及列國の指導者を述べ、「地質學者と聖地ジエルサレム」（小藤文次郎、東洋學藝雜誌）は聖地占領に於ける地質學者の功績を稱し、「近東に於ける地理上の戰爭問題」は（ホルヂッチ、G.L.）は巴爾幹の地理民族分布より南スラヴ羅馬尼亞諸族の地位を論じたり。露西亞方面に於て「露國の或方面（ステッビング、S.G.）は革命時代の露都及北露の狀況を叙し、「東北露西亞の森林」（ステッビング、G.L.）は英人の資本にて此森林を經營するの必要を說き、「西比利亞の將來」（スウエーン、G.L.）は歐人の資本にて同地を開發するの急務を說き、地理上より見たる露國（下田禮佐、史林）は同國一般の地理を說けり。中歐西歐方面にて、「アルサス、ローレーヌ問題」（ニューヒギン、S.O.）は同地を獨逸が保有するは軍事的理由の外農產及鑛產にありとして、其鑛鑛を詳述し、現在の佛國（ラブラーシュ）は同國家の形成、產業能力を述べて、アロ二州に及び、ヒカルヂーとフラン

ダースに於ける農村人口の配置（オルソー、G.L.）は両地の地質地形の差異より其農村の形分布に差異あることを指摘せり。「海峡墾道の地理的方面」（フォックス、G.L.）は英佛海峡の底には地質時代の河跡あり、此部分は深けれど他は一般に浅く、地質は不透水性の白堊層なれば墾道開鑿を可能なりと結論せり。阿弗利加方面に於て「セネガルの乾燥」（ウベール、アンナル）は此地方に鐵分の沈積多きを理由として其急激に乾燥しつゝあるを指摘し、ハイアトラス旅行（ドーグラス、G.L.）は氏が千九百十一二年にアトラス山地を旅行したる記行、「摩洛哥に於ける佛國の成功」（レガド、同誌）は佛國勢力の進展を説き、「ザンベジコンゴ分水界」（スチール、同誌）ナイルコンゴー分水（クリスチー、同誌）は共に中部阿弗利加未探極地の地理を明にせり、其他獨領に關する論文亦少からず。両米に就ては「南秘魯のアンデス」（バウマン）は一九一一年エール大學旅行隊の報告の一部なり、「中央亞米利加」（ケーベル、S.L.）は其沿革より一般地理と英國の勢力とに及ぶ、火山地震の叙述は特に注意すべし「英領哥倫比亞州の經濟上資源」（アンステッド、G.L.）は鑛産水力農牧適地等の將來利用し得べき資源を擧げ、「英領ホンヂュラス」（スウエーン、同誌）は從來よく知られざりし同州の地理を明にし、「加奈陀の天産と其國家管理」（メーデン、G.L.）は天産の無盡藏なるを説きて之を國家管理とするの必要を説けり。両極地方に於て「ウエッデル海」（ブルース、同誌）はウエッデル海の氣象及錘測の結果等を擧げたり。〔下田〕

彙報

●近衛公爵家古文書記錄類の展觀

昨年十月廿日近衛公爵家に於ては、其所藏の古文書・日記類の展觀を、東京華族會館に於て行へり。當日の出陳は何れも同家の秘藏にかゝるものより其粹を集めたるもの總數四十一點皆是れ稀觀の翰墨にして、大巻小簡一大偉觀たるの感あり。今其中の主要なるものを擧ぐれば、第一室日記類に於ては、御堂御暦日記廿九巻は、卽ち御堂關白道長の日錄にして、其中十三巻は實に自筆原本なり、他の巻亦宇治關白頼通の寫す所と傳へらる。此日記、世上流布のものは僅少の零本たるに過ぎずして、希にある傳寫本の如きも此自筆本によつて、補訂すべきものあり。其他後二條關白記卅巻、猪熊關白記十五巻、岡屋關白記愚管記、四十七巻、後法興院記三巻等近衛家代々の日錄を初めとし、平親信記、行親記、知信記、時信記、人車記、永昌記、愚昧記等平安朝末期の日記あり